

自称クールな姪っ子にセクハラをするだけの話。

橘田 露草

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大学生の笠原冬葉は、大学入学を機に姉の家同居する。女優をしている姉に代わって面倒を見るよう頼まれたのは歳不相応にクールでしつかりした小学4年生の姪、初島沙春だった。離婚により父親を失った沙春を励まそうと冬葉が行ったのは。

「沙春ちゃん、パンツを見せてくれないかな?」

「トーはバカなんじゃないですかっ!?!」

セクハラだった。

そしてそのセクハラは段々彼女を笑顔にしていき。

そして紡がれる少女たちとの物語。

セクハラ叔父と姪っ子、そして彼らを取り巻く少女たちが綴る物語です。

※この作品は「小説家になろう」にも掲載しています

目次

プロローグ	脱衣所での小戦争	1
そもそものはじまり		5
そもそものはじまり	ぱーと2	9
らき☆すけ		13
そもそものはじまり	ぱーと4	17
キャラプロフィール		21
初島家の朝&mp;大学へ行こう!		26
友人aの大谷さんとめっちゃ美人先輩		31
貴方の名前を呼んでいいかな		36
いざ入学式へ!		41
無礼講は無礼をしていい日ではないらしい。		45
別になくてもいいがあると嬉しいそんな部分		49
姪っ子とまつたりしない休日(性的な意味で)		53
居眠り花猫(前編)		58
居眠り花猫		63
笠原冬葉と大谷智希の距離感		67
未知との遭遇くろりとJDを添えてく		71
幼馴染というものは		75
新たなる旅立ち(学生生活的な意味で)		80
環ちゃんと遊ぼう!		84
姪叔父旅行Ⅱ新婚旅行という新解釈		91
電車移動にポツキーは必須(電車移動です)		95

プロローグ 脱衣所での小戦争

突然だが『洗濯』という言葉を知っているだろうか。
衣・食・住の3要素の一角を担う大事な家事である。

特に夏ともあれば毎日何枚もの洗濯物が出てきて、まあ世の中のお母様方本当にお疲れ様です。

それはともかく、一説にはあの坂本龍馬も日本を洗濯するとか言っていたらしい。

江戸時代に洗濯という言葉があったのかというちよつとした驚きである。

それも置いといて、だ。

「う〜ん」

初島家の洗面所兼脱衣所兼洗濯場。

僕こと笠原冬葉かさはらとうはは座り込んで悩んでいた。

そこに一人の少女がやってくる。

「……とーは？こんなどころで何やってるんです？」

少女はとても小柄だった、というか小学生である。

この春小学4年生になったピツカピツカの4年生である。

ちなみにランドセルはピンク。

僕が小学生の頃なんて黒か赤の選択肢しかなかったよ。

今の僕が小学生だったらゴールドとかシルバーを選びたいよ。

そしていじめられるまでがセットである。

いや、いじめられるんかい。

彼女の名前は初島沙春はつしまさはる。

さつき言った通り小学4年生の女の子だ。

僕の姉の娘、つまり僕にとつては姪に当たる。

歳不相応にクールで大人びたある意味面倒くさい年頃である。

「おはよう、沙春ちゃん。いやちよつと悩んでいてね……」

「おはようございます。悩みつて何をですっ？」

挨拶しつつ近づいてきた彼女に見せる。

——床に置いた色とりどりのパンツを。

「やっぱり小学生とはいえクマさんはもうぐげらっ!？」

それは見事な回し蹴りである。

顔の左側から鋭く入った一撃はすぐさま顔中に痛みを分散、大学生としてはやや小柄な僕の体を浮かし風呂のドアへと叩き込んだ。

「と、と、とーははバカなんですか!？」

眼鏡が吹き飛んだ僕に見えたのは顔を真っ赤にしてパンツを回収している沙春ちゃんだった、多分。

「さすがは小学生空手大会準優勝。見事な一撃だね」

「バカなんですか!？バカなんですか!？」

僕の褒め言葉も意に介さず『バカ』と繰り返す彼女。

あまり汚い言葉を使うなよ、JKに見えるぞ。

だが6年後にはどうあがいてもJKである。

時の移ろいは哀しい。

「あ、その顔はバカなことを考えている時の顔です!」

「失礼な、沙春ちゃんがJKになったらどんなパンツ履いているのか考えていただけだよ」

「想像以上に酷かったです!？」

どうせ沙春ちゃんもJKになったら紐だ透けだとイヤーンなパンツを履き出すんだろう。

……個人的には水色の横が紐、フリルがついた可愛いのを履いてほしい。

もしくは漆黒のような黒、後ろは勿論TT兄弟だ。

「なんで私のパ……その、下着を見ていたのか説明を求めます!」

「え、私の何?ボクシタギジャワカンナーイ」

「驚くほどゲスいですね、とーは!？」

幼女には下着じゃなくてパンツって言っただけで欲しい。

アンケートとったら80パーは軽く超える自信がある。

「とにかく説明を!」

あ、やべ、怒らせちゃった。

さすがにやり過ぎたらしい。

アレだ、女湯を覗こうとして仕切り板の穴を探そうとするのは微笑ましいけど、カメラで隠し撮りしたらアウトみたいな。

どの世界もやり過ぎはいけないのだ。

「洗濯しようと思っただけで色物とか分けてただけで、結構沙春ちゃんの下着が解れてたり穴が開きそうになってたりするなあと思っただけ」

最初はちゃんと真面目に見てたのだ。

でもパンツを見ていたら……その……ねっ！

ぶっちゃけ姪とか倫理とかどうでもよくなるよね！

「4年生になったことだしせつかくだから買い替えようかと。何枚ぐらい必要なの考えていたんだよ」

「そ、そうだったんですか……」

あ、いきなり蹴ったこと反省しているっぽい。

まあ下心なんて1割程度だし、ぶっちゃけ無罪といってもいいくらいだ。

「……ちよつと待ってください」

「ん？」

「そもそも洗濯物を確認しなくても私に聞けばよかつたんじゃないですか？」

あ、バレたっぽい。

まあ下心なんて10割程度だし、ぶっちゃけ死刑といってもいいくらいだ。

「ごめんなさいっ！」

秘儀DO・GE・ZA！

これを出した者は社会的に死ぬ。

いやダメじゃねーか。

「……許すとお思いですか？」

わあ殺意に満ちた素敵な笑顔。

ここにあの強面プロデューサーでもいたら『いい笑顔です』って褒めてくれるだろう。

「……ですよねー」

この後10分にわたって空手制裁を食らう僕なのであった。

やれやれ朝から初島家は騒がしい。

そもそものはじまり

「……ごめんお姉ちゃんもう一回言ってくれろ?」

『だから先月離婚したの。親権はコッチが奪い取ったけど』

「マジかー」

大学受験もとい合格発表を終え、後は残り1か月ちよつとの高校生生活を惰性で過ごしていたある日のことである。

9年間という長いのか短いのかよくわからない結婚生活を終了させた我が姉からの一報であった。

「え、僕何も聞いてないんだけど」

『親父にもオカンにも言っていないからね。アンタから伝えといてくれる?』

「……え、僕が?」

『そーそー。日曜夕方の大喜利番組みたいに面白おかしく伝えといて』

「悪いけど僕には黄色レベルのボケしかできないよ」

いや木久ちゃんのダジャレ好きなんだけどね。

ちなみに一番は楽さんと歌さんのブラックネタだ。

歌さん本当にお疲れ様でした。

「それで僕にわざわざ連絡してきたのはその報告?」

『ん、それもだけどアンタにお願いあんのよ』

「お願い?」

なんだろうか。

もしや離婚して欲求不満の姉とピーでピーなことをするとか……。

『アンタ、ウチに引っ越しなさい』

ああ、よかった。

そうだよね、現実でそんなアニマルビデオな展開有るわけないよね。

そうそう、お姉ちゃんの家引っ越すと……。

「……ぱーどん?」

『P a r d o n よ。アンタよくそれで英語テスト受かったわね』

「ごめん今お姉ちゃんの英語講座聞いている余裕ない。どういうこと？」

『娘の世話があるからって無理やり1ヶ月の有給を取ったんだけど明日には撮影で京都に行かなきゃいけないのよね』

お姉ちゃんはこんな性格だが女優をやっている。

しかも端役ではなくメインキャストがほとんどの超人気女優である。

正直最初離婚で驚いたのは1ヶ月も世間はおろかマスコミすらそのことを知らないっていうのもある。

『でも娘はまだ小学生。セキュリティしっかりしたマンションとはいえ一人でいさせるのは心配だから』

「……僕に白羽の矢を立てたと」

『偶然だけどアンタの通う大学と近いじゃない？実家そっちから通うより時間的にも経済的にもいいでしょ。家賃は食費とか光熱費だけでいいし』

「ふむ……」

どっちにしろ実家が出るつもりだったが、一人暮らししたら家賃だけで月数万かかるだろう。

それに比べたら食費・光熱費程度なら大した負担じゃない。

まあ彼女ができたりしたら家に連れ込めないから困りそうだが、そんな皮算用はひとまず置いておく。

「わかった。お姉ちゃんの家に世話になるよ」

『ん、そういうと思った。明日は土曜だし荷物はアンタの私物程度で大丈夫だから来なさい』

「い、いきなり明日!?!」

『善は急げ、よ。明日なら娘もいるし色々教えるように言っておくから』

「……はいはい」

それじゃあね、と電話が切れる。

我が姉ながら何とも傍若無人である。

「やれやれ……」

思わずラノベ主人公のようなため息が零れる。

それどころか明日からは姪っ子と同居というラノベどころかR―
18 同人的展開である。

……というか姪っ子は僕と一緒に暮らすことに同意しているのだ
ろうか。

「……だよね?」

実家からバイクで移動すること2時間弱。
メールで教えられた住所についたのだが。

「……でっか」

市の都市部という好立地で目の前のマンションは群を抜く超高層
マンションだった。

階段を登ろうものならオト○帝国ごっこができそうである。

あれマジ神映画。

エントランスのオートロックで部屋番号を押す。

数秒ベルの音が鳴り、声が聞こえた。

『はい、初島です』

幼い、それでいてしつかりとした声だ。

ゴホンと咳ばらいをして。

「は、は、はじめまして!」

……よし死のう。

オートロックに緊張して噛むヤツなんか自動ドアに挟まれて死ね
ばいいんだ。

『あのう……?』

「うんちよつと待ってて。今から入り口の自動ドアに首挟んでくるか
ら」

『なぜです!?!』

自動ドアはそういう使い方をするのではないと管理人のおじさん
に軽く叱られ、オートロックの機械の前に戻る。

「ごめんなさい、ちよつと取り乱しました」

『……取り乱して自動ドアに首を挟みに行く人初めて見たです』

大丈夫、僕も僕以外見たことないから。

「今日からお世話になる笠原冬葉です。免許証か何か証拠見せようか？」

「いえ、お母さんから話は聞いてますから大丈夫です。入ってください」

すると奥の自動ドアが開いた。

恐らくさっきの彼女が開けてくれたのだろう。

不審そうに僕を見る管理人さんに『どうも』と挨拶しつつエレベーターへ。

最上階の部屋に向かう。

「あ、これダメなヤツだ」

明かり取りであろう窓から最上階の景色を見てわかる。

ぶつちやけ僕は高いところが嫌いだ。

ジェットコースターやフリーフォールは大丈夫なんだけど吊り橋や歩道橋、そして外の景色といったヤツは大の苦手である。

これは高所恐怖症というやつなのかは医者じゃないからわからないけどとにかくダメなものはダメだ。

なるべく景色が視界に入らない様にインターフォンを押す。

するとすぐにドアが開いた。

そしてそこにいたのは。

「はじめまして、初島沙春です」

——美少女だった。

そもそものはじまり ぱーと2

リビングに通された僕はダイニングキッチンで紅茶を淹れる彼女の姿を見ていた。

初島沙春と名乗った少女はとても小柄な少女だった。

小学4年生といっても小さ過ぎる。

まあ僕も人のこと言えるほど大きくないし、姉もといこの子のお母さんはかなり背が高いから十分成長の余地ありだろう。

髪は僕や姉より少し濃い茶髪。

義兄さんが黒髪だったから混ざってこの色かな。

そして顔は、あの姉とイケメンの義兄の遺伝子をばっちり継いだ美少女だった。

数年もすれば姉をも超える美人になるかもしれない。

やがてトレーに2つのカップを載せた彼女がやってくる。

危なくはないだろうが一応とトレーを受け取る。

一瞬拒否の反応が見えたが、「ありがとうございます」と渡してくれる。

「笠原さんはミルクとお砂糖は？」

「いや、大丈夫」

「そうですか」

そう言いつつ彼女は自分のカップにミルクと砂糖を入れる。

暫しお茶を飲んで落ち着くが、さすがに年上として話さないと話題を探す。

「いやあそれにしてもすごい広いねー」

「母はそれなりに稼いでいますから。父もですけど」

いきなり爆弾である。

いや今の話お父さん必要ないでしょ!?! 「母はそれなりに稼いでる」だけでいいじゃん!?!

「そ、それに家具の趣味もいいー!」

「父の趣味です。出て行く時いらないうって言っていたので、もったいないですしそのまま使っています」

はい、ツーアウト。

笠原高校追い込まれました。

スリーアウトは何だろ、人生終了？

「……すみません。わたし話下手ですよね」

と、彼女がポツリと話した。

「い、いやお父さんのこともあったんだし。そもそも出会って数分の男と仲良くお喋りできるわけないから!」

「父のことは……関係ないとは言いませんけど元々話すのは苦手なんです」

ぶつちやけ僕はお姉ちゃんの離婚原因など知らないし、義兄さんと会ったのも数回程度だ。

そして彼女と会ったのは初めて。

じゃあここに踏み込む権利は今の僕には無い。

……だけど。

「よっしー!」

紅茶をゴクツと飲み干し立ち上がる。

突然の僕の行動に驚いた様子の彼女だったが。

「入学式まで後1か月、4年間通って計4年1ヶ月!はい、週に直すと全部で何週間?」

「え!?!ええと、365かける……」

「そんなことはどうでもいい!」

「じゃあ何で聞いたです!?!」

何を真面目に計算しとるだこの嬢ちゃんは。

「とにかくっ!計算するのが面倒くさいほど僕はここで暮らすんだ。じゃあまず何が必要だ?」

「ええと、自分の部屋……とか?」

「バカたれ、BL本の隠し場所だろうが!」

「むしろ持ってるのです!?!」

BLとアハーンな本の隠し場所は基本だね!

「そうと決まれば家の中を探索だ!具体的にはお風呂とかトイレとか更衣室とか!」

「全部如何わしい目的に聞こえます!?というか普通の家に更衣室はないです!!」

カメラとか仕掛けていいかな!?

「いやあ本当に広い家だねえ」

「ハアハア……満足していただけたなら」

20分程のお宅訪問ロケのノリを終え、リビングに戻ってくる。

「大丈夫?自宅で疲れるとか体力無さ過ぎない?」

「主に笠原さんがボケるせいで疲れているのですが!」

やり過ぎました、テヘペロ♪

「まあまあ、いつの間にか普通の叔父と姪程度には喋れてるしいんじゃない?」

「……あ」

「世間一般の普通の叔父が姪相手にセクハラトークしまくるかはわからないけど」

「それは普通の叔父じゃなくて最低のおじさんです。……もうっ!」

悔しいのか少しふて腐れたような顔をする彼女。

そんな顔を見ると年相応の普通の小学生だ。

「ごめんごめん。じゃあお詫びでもしようか」

ソファから立ち上がりダイニングキッチンへ。

材料があるかわからなかったが、ちゃんとあったため一安心。

数分後、カップを2個持ってリビングに戻る。

「はい、どうぞ」

「これ……ロイヤルミルクティーですか」

「お姉ちゃんはコーヒー派だし家でこういうの飲む機会ないでしょ?」

実家にいた時のお姉ちゃんは朝ブラックコーヒーを一気飲みしてから学校に行くという何ともワイルドな生活を送っていた。

ちなみに僕はコーヒーは大の苦手。

某ラノベでおなじみマツ○スコーヒーが限界だ。

「結構簡単だし後でレシピ教えるよ。冷めないうちにどうぞ」

「……いただきます」

よっぱどおいしかったのか一口飲んだ途端、ほわあとした顔をする彼女。

……いや、もうやめよう。

「おいしいかい、沙春ちゃん？」

彼女——否、沙春ちゃんはこくりと小さく頷くのだった。

らき☆すけ

午前11時。

ミルクティーを飲んだ後、沙春ちゃんが僕の部屋を案内してくれた。

他の部屋よりは少し狭い10畳の部屋だ。

ベッドやテーブルといった家具があることからもしや義兄さんの部屋かと思っただがどうやら普通に客室らしい。

「引越し業者が可哀想だから家具は新しいのを買うように、とお母さんから」

「どっちにしる家具屋さんが可哀想じゃないかな」

エレベーターがあるとはいえこんな超高層マンションにまで運ばされる業者さんには心底同情する。

うん、間違っても引越し業者や家具屋にはならないようにしよう。

「では私は宿題をしますので」

そう言っただけで沙春ちゃんは部屋を出て行く。

途端に静かになる。

「うーん、落ち着かない」

姉の家とはいえ初めて来るなら他人の家同然だ。

客間らしく広い割りに家具が少ないのも余計寂しさを感じさせた。

とりあえず荷ほどきをするものの持ってきた物の7割は本はほぼラノベ、2割はゲーム、1割が服なので置くところがない。

「とりあえず本棚とタンスは必要かな」

姉は多分ネットショッピングで買わせようとしているだろうが、ぶつちやけもつたないし、持っているだけで緊張する高級品は避けたい。

「うん、ニ〇リだな」

お値段御手頃、多分配送サービスもある……と思う。

ついでに夕飯の買い物でもしてこようかと部屋を出る。

沙春ちゃんに外出することを言いに行こうとするが。

「あ、沙春ちゃんの部屋どこか聞いてないじゃん」

多分、さつきのお部屋探索中に見かけた気がするがテンションが上がってたせいでまったく覚えてない。

「とりあえず片っ端から開ける……いやダメでしょ」

それで秘密の部屋でも見つけたらどうするんだ。

ロツ○ハート先生と戦うか？

イケメンは駆逐すべしだし。

「お姉ちゃんの秘密の部屋……。沙春ちゃんの秘密の部屋……」

どうしよう、どっちにしろアレなことしか思いつかない。

お姉ちゃんの方は性格的に三角木馬とか鞭みたいのがありそうだ。

沙春ちゃんの方はお年頃だけに意外とそういう系の本とかも持ってそうな気がする。

「つと、一人でこんなこと考えてるって僕は思春期か」

セクハラするならするで本人に直接しなきゃつまらないし、19にもなって痛々し過ぎる。

「んー、とりあえずリビングまで戻ってみるか」

とりあえず歩き出す。

今僕がいるのはリビングから廊下をずっと進んで一番奥の部屋だ。

隣がお姉ちゃんと言ってたが、それを抜いてもこの家にはまだたくさん部屋の部屋がある。

「そうだ、お風呂場の近くって言ってたっけ」

まあお風呂場がどこにあるかわからないんだけど。

トイレの場所もわかんないし、緊急時にペットボトルを準備しておくべきだろうか。

「わお、迷路」

設計者もといお姉ちゃんはこういうつもりでこの家を作ったのだ。

京都並みに一見さんに優しくないだろう。

とりあえずお風呂場を探すも全然ヒントがない。

と、その時だった。

「ん？」

今、目の前の部屋から物音がした気がする。

何かあつたら某霊長類最強の女性が駆けつけるこのセキュリティに泥棒はまずありえないだろう。

ならば答えは1つ。

僕は迷わずドアを開けた。

「沙春ちゃんここにいたん……」

この瞬間僕には間違いが2つあつた。

1つ目は、ノックをしなかったこと。

いかに小学生の部屋、いやお年頃の部屋だからこそノックは重要だつた。

2つ目は、開けた瞬間の熱風で察しなかったこと。

まだまだ肌寒いとはいえ暖房をつけるほどではない今日この頃。

であれば部屋から熱風が出るのはおかしいと一瞬で思うべきだつた。

結論を言おう。

そこは、沙春ちゃんの部屋ではなかった。

であれば、唯一と言つていい熱風が出る場所。

——目印にしていたお風呂場だつた。

「……へ？」

タオルで髪を拭いていた沙春ちゃん。

当然その下には隠すものなど一切なく。

さつきまでポニーテールにしていた髪をほどいた姿はまた違う美少女。

そして下に行くともまだ起伏の無い部分と桜色の頂点。

さらに下には子供らしいお腹と形のいいおへそ。

そして最後にシミ1つないつるつるの——。

「笠原さん……？」

……その前に視線に入ったのは所謂ハイライトさんがいなくなつた目だつた。

そして沙春ちゃんはパーに開いた手を。

「ぐふっ!？」

掌底は剣でできている

前には悪魔で、後ろは（さつき入ってきた）扉

（叩き付けられたせいで）幾たびの痛みを越えて（内臓が）腐敗

ただ一ミリの（彼女の瞳の）虹彩はなく

ただの一度も逃がしてくれない

故に、その生涯はマジで終わらせられそうで

その体は、きつと色々なところがぐちゃぐちゃにできていた

そんな詩が浮かんだ瞬間、僕の意識は刈り取られていった。

そもそものはじまり ぱーと4

小学生の裸を見るといとうらぶる的展開から1時間後。

気絶から目覚めた僕は9歳年下の幼女に土下座をしていたのだ
た。

「いやマジですんませんしたっ!」

「……」

無言である。

とはいえさつきまでのハイライトさんお留守状態ではなく、顔を仄かに赤くした所謂照れた状態だった。

まあそこに怒りももれなくプラスされているんだろうけど。

「その……女の子と暮らしていくうえでノックというのはすごい大事なことだと痛感致しました」

「……」

これでもダメか。

なら最終手段だ。

「というか偶然とはいえ沙春ちゃんの裸見れて僕的にはラッキーです
!」

「バカなんじゃないですか!?!」

あ、やっとな反応してくれた。

反応が罵倒というのもアレだけど。

「小学生の中学年から高学年のちやうど狭間というか、微笑ましさと背徳感が入り混じった触れてはいけない禁忌というか、幼女でありながら少女でもあるこの中間がマジパナイというか……」

「小学生相手に何語ってるんですか!?!も、もういいですから黙ってください!!」

ふっ、これぞ必殺『褒めとセクハラでなんやかんやでうやむやにしちやおう作戦』だ。

ちなみに“語って”と打とうとして“か立って”になったのは秘密だ。

いや立ってないからねっ!本当だからねっ!

とはいえ、作戦が成功したのか沙春ちゃんの顔が怒りから呆れと照れのみになった。

いや呆れられとったら駄目やん。

「その……笠原さんとっても重要なことを聞いていいですか？」

「え？スリーサイズなら上から」

「黙れ」

「はい」

ふええ……幼女怖いよお。

コホンと咳をし、沙春ちゃんが口を開く。

「笠原さんはその……小さい子がお好きな方なんですか？」

「……へ？」

小さい子が好き？

ああ、つまり僕がロリコンなんじゃないかと……。

「あつはつは!!ないない!!」

僕はその疑問を笑い飛ばした。

いやいや有り得ないから。

「本当ですか……？」

それでも疑っているのかジト目を向ける沙春ちゃん。

ならば。

「じゃあ僕の好きなタイプを教えるよ」

まず小学生の頃好きだった近くの幼稚園児のハナちゃん。

明るくて元気なところに惹かれたんだよね。

そして中学生の時好きだった子役のカナちゃん。

その笑顔に一目惚れしたんだよね。

最後に高校の時好きだった同級生の妹のエリちゃん。

ランドセル姿で『冬葉お兄ちゃん』と抱き着いてくれるところに、も

うこれ襲つていいよねってハアハアしていたんだよね。

いやあ本当に。

「ボクガロリコンナンテアリエナイヨー」

「すごい片言の上、汗が半端ないですけど!?!」

脂汗がどばあつと出てきた。

いや待て、小学生が幼稚園児を好きになるのは普通だし、中学生が幼稚園児を好きになるのもよくあること。

それにエリちゃんならリアル小学生じゃなくてイメ○ラの可能性もワンチャン……。

「ねーよ!？」

「何がです!？」

思わず叫んでしまい、沙春ちゃんを驚かしてしまう。

Orzのポーズになったまま頭をフル回転させる。

「でもエリちゃん小学生にしてはおっぱい大きかったし、僕の持っている本もアニマルビデオも8割は巨乳もの!だけど僕の好きなタイプは幼女!!」

そして僕はゆっくり顔を上げ、目の前のリアル小学生沙春ちゃんを目を見た。

「僕はロリコンなのかそうじゃないのかどっちなんだろう……?」

「知らないですよ!!」

すいません取り乱しました。

いやホントに申し訳ない。

「僕が小さい子が好きかは置いといて流石に姪っ子に手出しはしないよ」

「……わかりました。一応信用します」

「え、するの!？」

自分でいうのもなんだけどさっきのはセクハラどころじゃなかったと思うんだけど。

僕が沙春ちゃんの立場なら3秒でポリスメンに連絡すると思うけど。

「笠原さんのことは、お母さ……母から聞いていましたから」

ありがとう、お姉ちゃん!

生まれて初めてお姉ちゃんを大事にしようと思ったよ。

「ノリがウザくてスケベで、後そのうちパンツが2、3枚なくなるだろ

うけど気にしないであげてと」

ぶっ〇すぞ、お姉ちゃん！

生まれて10回ぐらいお姉ちゃんを殺戮しようと思ったよ。

「それに……優しい人だというのはわかりましたから」

「沙春ちゃん……!」

プイツと顔を反らしてしまふ沙春ちゃんだが、顔が少し赤くなっていた。

「で、ですからっ!」

立ち上がった沙春ちゃんは赤く染まった顔を反らしたまま手を伸ばした。

「これからあなたも家族なんですから……そういうところも受け止めます」

彼女の言葉に涙腺が潤みつつも、僕も手を伸ばし彼女の手を強く握った。

「じゃあ、沙春ちゃん! パンツ見せてもらってもいいかなっ!」

「バカなんじゃないですか!」

握られた拳はすぐさま僕の左頬に飛んできましたとき。

あ、これからお世話になります。

キャラプロフィール

キャラプロフィール（8割本気、2割適当）

笠原 冬葉【Toha Kasahara】

年齢……19歳

役職……大学教育学部1年生

一人称……僕

容姿……

薄い茶髪に黒縁眼鏡

身長はギリギリ160いかないぐらい

それなりにイケメンで本人も自覚あり（正確には姉が美人と言われているから自分もそこそこだろうという認識）

性格……超マイペースでやりたくないことはやらない主義

でも人から頼まれたら仕方なくため息つきながらやる

趣味……読書ほぼラノベ、料理、セクハラ

対人……コミュ力化け物で初対面でもガンガン行く

基本的には礼儀はしっかりするが、気に入らない相手にはとことん戦う

また、幼馴染の智希は扱いが非常に雑。

★呼び方・12話までの印象

沙春↓沙春ちゃん【可愛いくていい反応する姪っ子】

智希↓トモ【幼馴染。ただそれだけ】

笠原姉↓お姉ちゃん【怖いよお】

環↓桜井先輩【おっぱい】

育↓須川先輩【からかい上手の須川さん】

初島 沙春【Saharu Hattusshima】

年齢……10歳

役職……小学4年生

一人称……私

容姿……冬葉より濃い茶髪に同じ色の瞳

身長は130センチ

母親の幼少期にかなり似ている

今はまだ可愛い系

胸はまだない

性格：：クールでしつかり者（笑）

ツツコミせざる得ない立場

今時の小学生らしくかなりおしやれ

趣味：：読書、ゲーム

対人：：典型的な引つ込み思案で、コミュ力は信用している相手にしか発揮できず

学校ではクールというより無愛想で冷たい印象を与えてしまい周りと溶け込めていない

冬葉のセクハラは純粹に嫌がっているが優しさは感じている。

★呼び方・12話までの印象

冬葉↓とーは「優しいけどセクハラはやめてっ！」

智希↓？

笠原姉↓お母さん「いつもお疲れ様」

環↓？

育↓？

大谷 智希〔Tomoki Ohtani〕

年齢：：19歳

役職：：大学教育学部1年生

一人称：：私

容姿：：身長は178だがまだ伸びそう

スレンダーで胸はB寄りのAカップ

高身長美人でありながら美少女でもある

髪はブロンドのボブカット

空手をやっていた頃はポニーテールだった

性格：：良くも悪くも普通の女の子

冬葉に対しての依存は若干強い

趣味：：空手、スポーツ全般

対人：…冬葉が絡めばそこそこコミュ力有
また冬葉に対しては幼馴染として以上に信頼している
備考：…

★呼び方・12話までの印象

冬葉↓フユちゃん【幼馴染。大切なお友達】

沙春↓姪っ子ちゃん（冬葉と話す際）

【フユちゃんの相手は大変そうだなあ…】

笠原姉↓？

環↓桜井先輩【優しそうな先輩】

育↓？

桜井 環【Tamaki Sakurai】

年齢：…20歳

役職：…大学心理学部2年生

一人称：…私

容姿：…濡鴉色の髪と瞳

身長は160センチちよつと

胸はかなり大きく1年生の時にG線上を越え今はH

性格：…ぽやぽやしている

優しくて優等生だがやっぱりぽやぽやしている

冬葉がツツコミにならざる得ないほどぽやぽやしている

対人：…大学の天使と評されている程他学生に好かれている。

★呼び方

冬葉↓笠原くん【しっかりした後輩くん】

沙春↓

智希↓？

笠原姉↓？

育↓育ちゃん【親友。大切な存在】

須川 育【Iku Sugawa】

年齢：…22歳

役職：…大学教育学部2年生

一人称：…アタシ

容姿：：赤髪のポニーテールに同じ色の瞳
日焼けしている
胸は程よくCカップ
身長は165センチぐらい
性格：：明るくハツキリ言う
相手の好き嫌いもハツキリ言う
趣味：：料理、貯金
対人：：環をはじめ男女構わず仲良くする派
スキンシップも多いため男子の中には勘違いする者も多数
備考：：正式な年齢で入学していないことを気にしており、年齢の
話はNG

★呼び方

冬葉↓笠原【からかいがないある後輩】

沙春↓？

智希↓？

笠原姉↓？

環↓環【親友。大切な存在】

笠原（初島）姉

年齢：：26歳

役職：：女優、沙春の母親

一人称：：私

容姿：：冬葉と同じ薄い茶髪

とにかく美人

性格：：弟と娘の扱いはとにかく雑

悪い意味で策士

趣味：：新人女優で遊ぶ、タバコ

対人：：サバサバしている

★呼び方

冬葉↓冬葉【弟】

沙春↓沙春【娘】

智希↓？

環↓？

育↓？

ハナ【H a n a】

年齢：：？歳

役職：：？

一人称：：ハナ

容姿：：身長は139センチ

白銀のストレートヘア

性格：：おっさん系で口も悪い

なぜか冬葉を気に入ったらしい

趣味：：昼寝

対人：：教師連中は基本的に下に見ている。

★呼び方

冬葉↓？

沙春↓？

智希↓？

環↓？

育↓？

初島家の朝& a m p ; 大学へ行こう！

朝食を食べ終えた僕と沙春ちゃんは食後のロイヤルミルクティーを飲んでいた。

「新入生相談会……？新入生歓迎会なら聞いたことありますけど」
カップを傾けつつそう言う沙春ちゃん。

ちなみに初日に作ったのが相当気に入ったのか、朝食後はいつもミルクティーを2人で飲むのが習慣になっていた。

「うん、僕も同じだと思ってたんだけど」

そう言って彼女に見せたのは大学の日程表。

今日の日付には『10時〜 新入生歓迎会』と書かれていた。
現在の時刻はまだ7時前。

徒歩で行ける距離なのでまだまだ充分時間はある。

「むう……じゃあ、とーはは今日一日いないわけですか」
「流石に一日というわけじゃないと思うけど」

少しがっかりしたような顔をする沙春ちゃん。

小学校の春休みも残すは数日なのでどこかに遊びに行こうと思っ
ていたのだが。

とはいえ、10時という微妙な時間だと午前中は間違いなく潰れ、
お昼も大学で食べることになるかもしれない。

朝食と一緒に昼食も作っておいたが沙春ちゃんに寂しい思いさせ
てしまうのは胸が痛い。

「別に不参加でもいいんだけどね」

「それはダメです。新たなコミュニティを作る時にはこういった機会
をうまく利用しないと後々苦労します」

「えっと、もしかして実体験？」

「……黙秘します」

目を反らす沙春ちゃん。

どうやら彼女は新たなコミュニティ作りに失敗した側らしい。

まあ春休み中、ずっと家にいるか僕と出掛けるかのどっちかだった
から察していたけど。

特にいじめられているとかじゃないなら、余計な手出しはしない方がいいだろう。

……ところで、だ。

さつきからコミュニティだ黙秘だと小学生らしくない難しい言葉を使う沙春ちゃんだが、この1ヶ月暮らしてきて1つ弱点に気付いた。

それは……朝が弱いことだ。

とりあえず今朝の沙春ちゃんの様子を振り返ってみよう。

朝6時30分。

朝食を作っていた僕はリビングのドアが開いたことに気づいた。

そして同居人にしてこの家唯一の女の子が入ってくる。

「おはよー、沙春ちゃん」

「おはようございます、とーは」

欠伸をしながら歩く沙春ちゃんは、そのままリビングのソファアーム横になった。

残念ながら普通のズボンタイプのパジャマなのでパンツは見えない。

だが、仰向けになったことでチラリとのぞくおへそがまたいい！

さらに着崩れとボタンを上まで全部止めてないせいで綺麗な鎖骨も見える。

運がいいと肩のあたりまで見えるのだがこれはこれで最高。

『見るだけなら犯罪じゃないぜー』と我が姉上も言っていたから、もうジツと見る。

「とーは？どうしたんです？」

おっと、視線に気づかれたらしい。

……ここは華麗に誤魔化さないと。

「沙春ちゃんの鎖骨へそハアハア」

……本音というのはどうしてこうも邪魔なのだろう。

前に読んだラノベで本音を無くすって内容があったが僕も無くし

たいものである。

アレだ、数学のパラドックスってやつだ。

全然関係ない気がするけど。

「……」

チラリとソファの方を見ると、もぞもぞと着崩れた服を直す沙春たん……ちゃん。

その目はハイライトさんの出張中だった。

「どーは……何か言い残すことはあるです？」

え、死ぬん？

爽やかな春の朝に僕死ぬん？

だが、ここからだ。

彼女を笑顔にした僕の話術で乗り越えるのだ!!

「今度は沙春ちゃんの腋が見たい!今度は沙春ちゃんの腋が見たい!」

こうして僕は10分のブラックアウト旅行を楽しむことになったとき。

そんな可愛らしい寝起きの沙春ちゃんである。

え? ほぼお前のセクハラじゃねーかと?

いやいや、小学生ってスカートめくりとかするものでしょ?

いわば小学生Ⅱセクハラと言ってもいいくらいだ。

「折角の機会ですから楽しんできてください。あつ、お酒とかはダメですよ!」

「わかってるってば」

沙春ちゃんもそう言ってくれてるし、まあ僕も友達とはいかなくても大学で会話できる相手ぐらいは欲しい。

「あ、あと……あんまり遅くならないでいてくれると嬉しいです」
……想像して欲しい。

美少女からそう言われるのを。

照れから目を反らして、態度はちよつと素直になれないものの言葉には寂しさを覗かせてるそんな彼女を。

そんな彼女を見て、僕は……僕は!!

「沙春ちゃん、今度スカートめくりしていいかなっ?」

「急になんなのです!?!」

そっちの欲望が勝っちゃいました。

身支度を済ませ、外出すること数分。

特にイベントもなく大学に到着する。

御厨ヶ谷学園。

県内トップ、全国的に見てもベスト5に入る有名な大学である。

といつても僕はギリギリの成績で入ったのだが。

ちなみに僕が選んだのではなく、友人と一緒に行くとういつの間にか願書が出されていたのだ。

そんなどうでもいいことを考えつつ、構内に入ろうとする。

と、その時だった。

「や、やめてください……!」

「いいから俺たちと出掛けようぜ」

「大学で教えてくれないことを教えてやるよ」

うわあ……今時ナンパなんてあるのか。

チラツとみると1人の少女に男2人が絡んでいた。

ご丁寧にも壁と男たちの体で行く先を塞いでいる。

「本当に急いで……あっ!」

あ、気付かれた。

よし逃げよう……と行動する前に腕を掴まれた。

「こ、この人私の彼氏なんです!」

ぎゅーっと腕を掴まれる。

……巻き込まれたんですけどー。

「ちっ!彼氏持ちかよ!」

「どんなに辛い時でもその手絶対に離すなよ!」

彼氏持ちに手を出さない良識ぐらいはあるのか去って行く男たち。

それはともかく。

「助かったよ。ありがとう、フユちゃん！」

「うん、何で君は僕を巻き込んだんだろうね」

さっきの男たちの前では見せなかった笑顔を見せる。

いやそれ自体はめっちゃくちゃ可愛いんだけど。

「とうか、フユちゃん。もしかしてたださっき逃げようとしてたよねえ……?」

「勿論そうだけど」

「勿論!? 友達が絡まれてたのに逃げようとしてたのおっ!?」

「いや、だって」

掴まれてると反対の手でスマホを操作する。

そして一枚の写真を少女に見せる。

”高校生女子空手大会全国優勝”の大谷智希おおたに　ともきに勝てるわけないでしょ」

表彰台の上で照れたように小さくピースをする彼女の写真だった。

ちなみにしっかりロックをかけた永久保存版である。

友人 a の大谷さんとめっちゃ美人先輩

大谷智希、18歳。

通称……というか僕はトモと呼んでいる。

中学から空手を始めた彼女はその才能をメキメキと開花し、その年のインターミドルで1年生にして優勝。

それから高校まですべての大会で優勝し伝説となった。

つけられた異名は――。

「リアル和田ア○子」

「それ、フユちゃんが勝手に呼んでたやつだよねえ！　というか、ア○コさんは元々リアルだから！」

「え、じゃあカオ○シ？」

「先週の金○ロードショーだよお！　というか時事ネタはやめよお！」

みんなは湯婆婆派？　銭婆婆？

『獅子殺し』――まあ定番だね」

「うう……女の子につける名前じゃないよお」

「僕の提案した『なんか強い人』は即却下だったんだよな」

「獅子殺しがマシに思えてくるからやめてよお!？」

他に『めっちゃ強い人』とかもあつたのだが。

無念である。

「まあ、しょうがないよ。身長も高……え、ちよ、トモ。もしかしてまた伸びた？」

「うっ!？」

思わず指摘すると智希は目をそらした。

僕は先月までの彼女を思い出しながら観察する。

「2、3センチは伸びてるよね。アレかまだ成長期続いてますってこと?。」

ここまでの会話でわかるだろうが、智希は背が高い。

具体的な数字を出すなら176センチ。

だが目測でも明らかにそれより大きくなっていた。

ちなみに身長も高いがスタイルはよく所謂モデル体型ってタイプ

だ。

正直よくこれで空手はともかく優勝できるなと思う。

「うう……私より大きい男の子なんていっぱいいるよお！」

「おいそれは僕にケンカ売ってるのか？」

涙混じりに言い返してきた智希だったが、それが僕の逆鱗に触れた。

……あ、間違えた。

姪の叔父の逆鱗に触れた！

「中学から高校までの6年間で2センチしか伸びなかった僕の気持ちを考えろお！」

「それに関しては本当に同情するよお！」

「マジかあ！」

「マジだよお！ごめんねえ〜！」

なぜか語尾が同じになった僕らだったが、周囲に人が増えてきたため大学に入ることにした。

あ、小学校からの幼馴染なんです。

「……というわけで、これから大学生活を送る君たちが不安に思うことを先輩に相談してみてください」

ミツシヨン系の大学のためか、礼拝室があつてそこに僕ら1年生は集められていた。

ざっくり数えたが来ている1年生は3分の2ぐらいか。

「ではここからはグループに分かれましょう。クジを配りますのでその番号のところに集まってください」

壇上の男の先輩がそう言う。

しかしなんでこう、真面目な人ってメガネなんだろうか。

アレか、メガネから真面目パワー的なの出てるのか。

僕もメガネだけど姪っ子にいつ通報されるか冷や冷やしている不真面目野郎だぞ。

なんてくだらないことを考えているうちにクジが回ってくる。

「適当に引いて開くと、”6番”だった。」

「フユちゃん何番だったあ〜?」

「6番。トモは?」

「2番だったよお」

「あらら、離れちゃったか。」

「まあ智希以外にも友達を作るいい機会だろう。」

「智希と別れ、6番のグループの方へ向かう。」

「あつ!6番の子ですか?」

「委員の腕輪をつけた先輩に声をかけられ、そちらをみると。」

「こんにちは!心理学部2年の桜井環です」

「――天使がいた。」

「美人というのはこういうのをいうのかと思う程綺麗な人だった。」

「艶やかな長い黒髪に同じ色の瞳。」

「そして、大人の魅力たっぷりの大きな胸。」

「男の理想を詰め込んだザ・女の子といった女性だ。」

「えつと、違いました?」

「僕が何も答えないため困った顔をする彼女。」

「慌てて礼をする。」

「文学部の笠原です。あつ、6番です!」

「よかったです。こちらに座ってください」

「僕以外は全員座ってて空いているのは一個だけだった。」

「僕含め1年生5人は全員男子、先輩方は3人とも女の子だ。」

「こども綺麗に分かれていますと合コンみたいだなと思ってしまう。」

「ひと通り自己紹介を済ませると、桜井先輩の隣に座る須川育すがわ

「いく先輩が口を開く。」

「じゃあ、何か質問ある人?」

「「はい!」」

「勢いよく僕以外の4人が手をあげる。」

「というか、なんでみんなやる気満々なんだ。」

「……という疑問は当てられた山田某なにかしくんの質問ですぐ判明した。」

「桜井先輩って彼氏いるんスか!？」

……よし、山田某くんよ。

このドン引きする女性陣を見たまえ。

「てかスリーサイズは？」

「それだけデカいと肩凝るでしょ？」

おい、君たちそれセクハラだぞ。

僕が言えることじゃないけど、僕が言えることじゃないけど！

どうやら合コンみたいだと感じたのは僕だけじゃないらしく、ここで桜井先輩と仲良くしたいという下心見え見えだった。

「はあく、つたくこのバカ共が……」

頭を押さえる須川先輩たち。

桜井先輩は顔を真っ赤にして下を向いていた。

「もう！あつ、そこのメガネ！」

「……はい？」

なんか指差された。

うわあ嫌な予感。

「何かまともな質問ないの？」

「いやそもそも僕手を上げてな」

「(ギロツ)」

わーい、睨まれたー(棒)

とはいえ、何か考えないとコイツらと同じ扱いにされそうだ。

「えーと、先輩たちが思うこの大学の魅力って？」

「……うわ、フツー」

須川先輩聞こえてるからなー。

？
というか、まともなの考えたら考えたで文句言われるってなんなん

桜井先輩はようやくやくまともにも答えられる質問だったからか口を開く。

「私は購買のプリンかな。限定10個だからすぐ無くなっちゃうんです」

「へえー、甘いのが好きなんですか」

「はい、大好きです♪」

いやあ……可愛いっすなー。

どうでもいいが、男子たちおまえらサムズアップするなや。

同類だと思われるだろうが。

「私は図書室かしら。二階分でかなり充実してるから。育は？」

「アタシは一人暮らししてるから生活の話になっちゃうけど近くにスーパーとかがあるのが魅力かしら」

「そ、それは大学の魅力じゃないような……」

「しょ、しょうがないじゃない！メガネがつまらない質問するから悪いのよー！」

「僕ですか!？」

ようやく冷え切った空気が暖まり安心する。

この後、ほぼ僕一人と先輩3人の相談になった状態で制限時間が終わるのだった。

貴方の名前を呼んでいいかな

きつかけはお母さんからの電話でした。

『へー。実家でも冬葉が作ってるとは聞いてたけど』

「うん、笠原さんとても料理上手なんだよ」

話の内容は、2週間前から一緒に住んでいる叔父の笠原冬葉さんのことです。

お母さんから弟……つまり叔父さんのことは色々聞いていましたが前日にウチに来ることを聞いた時はびっくりしたものです。

『にしても2週間でよく馴染んだものねー。アイツがコミュ力高いとは言え、1ヶ月はかかるものかと思ってたわ』

「そう、かな?」

というか、それでも1ヶ月でどうにかなると思っていたんですか。

お母さんって結構笠原さんの評価高いですね。

「むしろ問題は沙春の方かしら?」

「私?」

何かしてしまったのでしょうか?

料理とか家事を任せっきり……それはそれで女子力のピンチな気がしました。

ですがお母さんが言ったのは全然違う方でした。

『沙春……アンタいつまで冬葉のこと名字で呼ぶつもり?』

「……えっと沙春ちゃん? ご飯おいしくない?」

「……はっ!」

電話をした次の日。

朝ご飯の最中に思い出してボーツとしてたみたいです。

見れば笠原さんとはとくに食べ終わってます。

「い、い、ごめんなさいです」

慌てて少し冷めたパンをかじります。

私が食べないといつまでも片付けられませんし、家事を全部任せて

しまっている以上そんな迷惑は掛けられません。

「どこか調子悪いとか?」

心配そうに私を見る笠原さん。

こういう優しいところに感謝してますが、今は申し訳ないです。

「あつ、生理か!」

・・・こういうところは最低ですが!!

「どうしよう、お赤飯炊かなきゃ!? そういう道具も買ってこようか!」

「炊かなくていいですし、いりません!! そもそも来てません!」

まだ私は9歳です!

じゃなくてもそもそもデリカシーが無さ過ぎです!

「じゃ、じゃあ妊娠!」

「バカなんじゃないですか!」

とにかくつ!

電話のこともありますし、笠原さんのことを名前で呼んでもいいと思います。

・・・もしかしたら長い付き合いになるかもしれないですね。

「いやー、沙春ちゃんが来てくれて嬉しいよ」

10時ちよつと過ぎ。

笠原さんが出かけるというので無理を言って付いていかせてもらいました。

その・・・どこかで名前で呼べるタイミングがあるかもしれないし。

「可愛い子とデートできるなんて役得役得」

「でっ!? お、叔父と姪が出掛けることをデートとはいいません!」

「つまりここで沙春ちゃんのお尻を触ってもオツケーってことだね!」

「それはデートじゃなくて警察事案ですっ!」

全く・・・この叔父は隙あらば私にそんなことばかりいいます。

いい人なのはわかってますがこういうところは控えておいしいもの

です。

「……ここは私も攻めるべきでしょうか。」

「そ、そもそも……笠原さんってデートしたことあるんですか？」

「え、あるよ？」

「……あつさり言われたんですけど。」

「小学校の時とかクラスの女の子と出掛けることも多かったから。」

『デートだね』って言う顔真っ赤にしてたし」

笠原さんは意外と経験豊富さんでした。

まあ確かに小柄ですが顔立ちは整っている、というより可愛らしいです。

あのお母さんの弟だからおかしくないですね。

「でも久しぶりのデートだから楽しいな」

よく素面でそんなこと言えますねっ！

負けてられません！

このクールな初島沙春の力を見せる時です！

そう、クール過ぎてクラスメートから『初島さんって近寄りがたい

よねー』と評される程の……。

「いや、沙春ちゃん急に何で凹んでるの!？」

「お、お気にならず……」

い、今は私がボツチとか関係ないので！

自然に、そう自然に『冬葉さん』と……。

「と、と、と、ちよーはさん!」

「超破産?!急に何!？」

何で『と』まで言えたのにいきなり噛むですか、私!!

そして超破産ってどう言う状況です!!

いえ、理由はわかってます。

……ぶつちやけめちやくちや恥ずかしいです!

まさか男の子の名前を呼ぶことが難易度オニレベルだったとは

……。

と、とにかく今の失敗を誤魔化さないで。

「お、お昼は超高級イタリアンで笠原さんを超破産させようと思って」

「えー、僕何か悪い事したっけ……？」

まあいいけど、と笠原さんはスマホでお店を探してくれています。優し過ぎて罪悪感が……。

あっ！そうです、スマホ……つまりネットです！

昨日、念のためパソコンで”名前で呼ぶ方法”と調べてメモしたのです。

サイトには”彼氏を名前で呼ぶ方法”とありましたが、方法自体はそんなに変わらないはずです。

慌ててポケットからメモを取り出します。

ふむふむ、なるほど……。

”背中に字を書くクイズで名前を書いて『正解は○○！』で呼ぶ”

”キスしながら自分の舌で相手の舌に名前を書く”

”彼の（規制）が（規制）に入った時に『○○の（規制）大きいよお！』で呼ぶ”

……できるかあ！です!!

クイズはともかく他ののは私がやったら痴女じゃないですか！

昨日の私どうかしてるんじゃないですか!!

「……ちゃん……沙春ちゃんってば！」

「はっ!?」

「お店決めたけど……やっぱり調子悪いの？」

「い、いえ……」

……私、何をしてるのでしよう。

笠原さんの予定を邪魔して、心配まで掛けて。

「んー、ごめん沙春ちゃん。ちよつとそこの公園入ろう」

「はい……」

笠原さんの後について行き公園の中に入りました。

少し歩いた先にあつたベンチに並んで座ります。

「あ、沙春ちゃん。お願いがあるんだけど」

「……なんですか？」

笠原さんの言葉にも適当に返します。

私の心は深く沈んでました。

「冬葉って言うてくれる？」
「とーは」

そう、深く深くに……。
……へ？

「おっ、呼べたねー」

「と、とーは!?! 一体何を!?!」

「また呼べたね。はいはい、笠原さん家の冬葉くんだよー」

……呼べ、ちやいました。

それもこんな単純な方法で。

「実は事情はお姉ちゃんから聞いていた冬葉さんでしたー。『あの子
フツーにヘタレだから』って言われてて、沙春ちゃんに限ってまさか
と思っただけだ」

「な、な、な……」

「途中頑張ったのにあそこでヘタレるかー」

つまり、とーはは全てのことを知っていて……!?!

恥ずかしさからつい叫んでしまいました。

「とーはのバカあ!!」

いざ入学式へ！

春ー。

暖かな風と桜が僕らの新たなる門出を祝うそんな季節。

そして、今日4月5日。

「安西先生、小学校に行きたいです！」

「誰が安西先生ですかっ！」

僕は土下座していた。

いや、三井くんのアレじゃ土下座じゃねーよ。

なぜ僕が小4女兒に朝っぱらから土下座してるか、説明すると長くなる。

今日は小学校の新学期もとい入学式だからだ。

あ、一言で終わっちった。

「ですから始業式に保護者は入れないんです！というか、先生の話も聞くだけだから大した行事じゃないです！」

「でもそういうのも将来の大事な思い出じゃん！」

お姉ちゃんから沙春ちゃんの面倒を託されている身だし、沙春ちゃんの記録は僕が責任持って録画したい。

「……じゃあ聞きます。始業式の私のどんどころを撮りたいんですか？」

お、畳み掛けるチャンスっぽい。

だがここはギヤルゲーでもお馴染み、全てを分ける分岐点だ。

セーブができない以上、失敗はできないー。

「うとうとしてヨダレを垂らす沙春ちゃんや、校歌を間違えて一人完全にズレる沙春ちゃんや、寝ぼけて服を脱ぎ出す沙春ちゃんをだよ！」

「服は脱いだことないです！……あ、じゃなくて、全部したことないですっ！」

間抜けは見つかったようだな！

だが選択肢は失敗したらしく、怒らせてしまった。

「とっつかっ！」

沙春ちゃんが壁のコルクボードを指差す。

そこに貼つてあるのは一枚の紙。

「とーはも今日入学式じゃないですかっ！」

はい、そうですー。

「うぐう……」

家を追い出された僕は、たい焼き少女のような鳴き声をしつつ入学式会場までの道を歩いていった。

ちなみに本家はラ○ウさんなんだってね。

超アタタタだね。

「なるほどねえ。姪っ子ちゃんと同居してるって聞いた時はフユちゃんの頭が壊れちゃったかと思つたけど」

「おい」

そしてなぜか智希がいた。

一瞬ストーカーかと思つたが、どうやら彼女が一人暮らししているアパートからの通り道らしい。

「だ、大丈夫だよっ！フユちゃんが壊れても私はそばにいるからあ！」

「愛が重い」

壊れたとーくと壊れたとーちゃん開幕である。

2人とも壊れてるってどんな物語やねん。

いや元ネタもみんな壊れてたけど。

そんなこんなで、とーとーコンビが歩くこと数分。

県内でもかなり大きい駅が見えてきた。

「会場ってどこだっけえ？」

「駅の近くみたいだけど……おっ、誘導してるしあそこじゃないか？」

近くの何たらホールだかシテイだかという建物に、大学の名前が書かれたプラカードを持った人がいた。

スーツやら礼服を着た少年少女たちも中に入っているし間違いないだろう。

「はーい、こちらですよー……あつ、笠原くん！」

何とプラカードを持っているのは桜井先輩だった。

僕に小さく手を振ってくれる。

……物理というものは素晴らしいものでその僅かな動作でも大きな胸が揺れていた。

「入学おめでとうございます!」

「ありがとうございます。桜井先輩は誘導係ですか?」

「はい、ボランティア募集していたので」

わざわざボランティアで貴重な休みを一日潰すとは、流石である。

来年は僕も見習って会場近くのアニ○イトまでは来よう。

おっと、智希を忘れていた。

僕らがいきなり親しげに話し出して驚いていたみたいだが。

「彼女は僕の友人の大谷智希です」

「いや何で英語の教科書風?」

「彼女はこの前の相談会でお世話になった桜井環先輩だよ」

「普通!?全然教科書風じゃないよお!」

うるさいな、智希。

紹介し終わったところで桜井先輩が智希に手を伸ばす。

「心理学部の桜井です。よろしく願いますね、大谷さん」

「あつ、こちらこそ!よろしく願いますっ!」

最初は戸惑っていた智希だったが、桜井先輩の天使っぷりに普通に会話できていた。

「それにしても、大谷さん大きいですね」

「その……先輩も大きいですね」

「へ?小柄な方だと思えますけど」

まあ……その、ね。

智希も無いわけではないからね。

中学の時うつかり触れてしまった僕が保証する。

「あつ、ごめんなさい引き止めちゃいましたね」

「いや先輩と話せてよかったですよ」

「ふふっ、そう言っていただけだと嬉しいです。学部は違いますが仲良くしましょうねっ!」

はい、仲良くしたいです。

具体的には結婚できるくらい。

「……小さくないもん」

……智希のフォローはちよつと時間がかかりそうだった。

無礼講は無礼をしていい日ではないらしい。

入学式という名の睡眠時間を終えて、僕ら新生は大学へと来ていた。

そこでまたもや説明とちよつとした新生歓迎会を受けた……というかまた寝ただけだ。

昨日の夜遅くまで、沙春ちゃんとやんやん（意味深）し過ぎたかな。

まあ、いやらしい意味じゃなくマリ○カートだけだ。

アレだね、春休み最後だからってはしやぎ過ぎはダメだねー。

まあ、そんなこんなで夕方。

今現在の僕がいるのは。

「こつち酒足りないよー！」

「追加のメニュー、唐揚げと何がいいつすかー？」

「ホルモンは焼かれてこそ価値があるんや」

……人類が崩壊した世界でした。

いや嘘、人類は崩壊してないよー。

ドラえもんに会う22世紀まで死ぬわけにはいかないんだ。

新生歓迎会を終え、さて帰ろうかと思つた僕だったが、なぜか焼肉屋に来ていた。

というのも毎回大学がやる歓迎会はショボいため、先輩方が身銭を切つて『裏・新生歓迎会』をやってくれているらしい。

店は主催者の先輩方が毎年決めているそうで、今回は焼肉屋貸し切りとのこと。

とはいえ、僕には沙春ちゃんのご飯を作る仕事があるのだが、さつき沙春ちゃんに電話したところ。

『だからこういふ交流が大事だつて言つたじやないですか。こつちは勝手に準備しますから楽しんできてください』

と、怒られてしまった。

せっかく沙春ちゃんがそう言つてくれたんだし、お言葉に甘えて楽しませてもらう。

そうだ、帰りにコンビニスイーツでも買つていこう。

乾杯も終わり既にみんな自由に席を移って食べたり飲んだりしている。

ただ、さすが『裏』と言われていているだけに、普通にビールやらカクテルやらがテーブルに並んでる。

明らかに同級生1年生と思える連中も呑んでいるようだが、まあ固いこと言いつこ無しだろう。

「笠原くん、呑んでますか〜?」

「あ、桜井先輩」

飲み物片手に手を振りながら近づいてきたのは桜井先輩だった。

「昼間はお疲れ様でした。烏龍茶ですけど飲んでますよー」

「お疲れ様です〜。烏龍茶も冷えていて美味しいですよね」

そう言う桜井先輩だが、赤い顔を見るにただの烏龍茶じゃなくて烏龍茶ハイとかだろう。

空いていた隣の席を綺麗に整えると、『ありがとうございます』と礼を言い座る先輩。

「アルコールはあまり好きじゃないので、烏龍茶一択なのがちよつと寂しいですけど」

「あれ、前に呑んだことあるんですか?」

「高校生の頃親父に付き合っって何度か。酒好きだったので色々吞ませられましたけど」

つと、流石に未成年飲酒は口を滑らしたか。

怒られるかと思ったが桜井先輩は笑顔のままだった。

「そうなんですか〜。笠原くんが大人っぽいのもそのせいですか〜」
「…僕大人っぽいですかね?」

むしろ沙春ちゃんからは子供っぽいと怒られるまであるが。

「とてももしっかりしていると思えますよ。こういった場でもちゃんとした敬語使ってますし。さつき私が座る前に座布団を綺麗にしてくれたところとか」

「えっと…どもです」

ヤバい、美人の先輩に褒められるの超恥ずい。

飲み物でごまかそうと思ったが、既にグラスは空だった。

「飲み物注文しますけど先輩もお代わりします？」

「あつ、えつと……」

桜井先輩のグラスもあとちよつとだけだったので聞いてみたのだが、なぜか桜井先輩は迷っているようだった。

少し逡巡して、残った飲み物を一気にあおった。

「そ、それじゃ……烏龍茶ハイをお願いします」

それから1時間後。

「あはははっ！笠原くん世界が回ってますよ〜」

酔っ払い先輩第1号ができていた。

「先輩っ！電柱にぶつかりますよ〜！」

「でんちゆう、でんちゆう、ぴっぴかちゆう♪」

うん超かわいい。

……そんなこと思ってる場合じゃねーよ、僕。

簡単に説明すると、だ。

あの後烏龍茶ハイのお代わりを飲み干した桜井先輩は完全に酔っ払ってしまった。

僕が止めるのも聞かずに3杯4杯と飲み進め、あつという間に計6杯も呑んでしまったのだ。

そこでようやくお開きになったのだが、その頃には桜井先輩はどう考えても1人で帰れる状態じゃなくなっていた。

そこで、女性の先輩が送ろうとしたのだが。

『いやです〜っ！笠原くんに送って欲しいです〜！』
となぜかご指名を。

女性の先輩が止めてくれるかと思ったのだがあっさり許可された。

『まだ飲み足りな……じゃなくてキミなら大丈夫でしょ！』と彼女の言葉だが、僕はその先輩とは10分弱話しただけなのだが。

そんなこんなで会って数日の女の子を送ることになりました。

いやどこかの幼女軍人じゃないけどマジで言いたい。

……どうしてこうなった。

「笠原くん楽しいですねー」

「そうですねー」

まあ実際普通に楽しかったりする。

沙春ちゃんと違ってプルプル揺れる一部だったり。

沙春ちゃんと違ってゆさゆさ揺れる一部だったり。

沙春ちゃんと違ってふにふに揺れる一部だったり。

…あとお喋りだったり。

とはいえ、会話こそとろけまくりだがスキンシップが多かったりしないのでそこは残念…もとい安心していい。

明日、記憶が変に歪んでおっぱい触られたとか言われたら人生終わっちゃうし。

それに、自宅へも彼女が先導して歩いてくれている。

「先輩、お家はこっちの方なんですか？」

「そうですねー」

前に何かのテレビでやっていたが酔っ払っていても脳のナビゲーションとやらで自宅へは帰れるらしい。

そう思って桜井先輩に付いてきたのだが。

「先輩の家とウチって結構近所なんですね。ウチもすぐ近くなんですよ」

「ホントですか？偶然ですねー♪」

いや、本当に偶然である。

そのまま商店街を抜け、通りを何本か歩き。

そしてたどり着いたのは、市内一の高さのマンションだった。

「ここって…」

そう、そこは最上階に初島家があるマンションだった。

…あ、コンビニ寄るの忘れた。

別になくてもいいがあると嬉しいそんな部分

前回までのあらすじっ！

僕こと笠原冬葉は大学進学を機にお姉ちゃんの家に住候することになったのだが……その姪っ子がヤバかった。

『とーは私が養ってあげますから何もしないでいいんですよ……』

ロリ巨乳の姪っ子に監禁された僕は、やんやん（意味深）な日々を送ることになった。

果たして僕は童貞を守ることができるのか！

……というわけで、巨乳の先輩に付いてきたのはウチのマンションでしたー。

いや普通に驚いてるよ、超びっくりしまくりんぐだよ。

「あ、あの先輩？本当にここがお家なんですか？」

「えへへ。笠原くんも一緒に呑み直しましょうよ」

わあ、会話成立しねー。

そりやそうだよね、あんなに呑んだんだし。

仕方なく付いて行くと桜井先輩が止まったのは一番奥の部屋だった。

鍵を取り出し、カチャカチャすると鍵が開いた。

どうやら本当にこの部屋の住人らしい。

「育ちゃん、ただいまあー」

先輩が部屋の中に声をかけると、部屋の奥からパタパタと足音が聞こえてくる。

「もう、環っ！迎えに行くから連絡してって……え？」

奥から出てきたのは、新入生相談会の時にあった先輩だった。

まさに運命の悪戯ってやつだ。

「笠原くん……？」

「えつと……先輩？」

まあ名前忘れたのですがー。

アイドルみたいにかわいい桜井先輩の横にいと霞んでしまうかもしれないが、須川先輩も充分かわいい。

ポニーテールに程よく焼けた肌が、『元気な女の子』って印象を与えてくる。

……なぜかコミックL〇が読みたくなつた僕は疲れてるんだと思う。

「そういうえば、先輩方は二人暮らししてるんですか？」

L〇は後で読むとして、気になったことを聞く。

家具や玄関の靴から察して聞いたのだが。

「ん、正確には3人暮らしかな。アタシと環と環の妹の」

「ええと……何か複雑な事情でも？」

「あははっ、無い無い。テレビで見たシェアハウスが面白そうだったから環たちを誘っただけ」

恐る恐る聞いたが須川先輩は笑って理由を教えてくれた。
「うか。」

「先輩、聞いたってなんですけど女の子3人暮らしとか言わない方がいいですよ」

「ホントに君が言うなだね」

まあ別になにもしないけど。

何かする勇氣もないけど。

「何か笠原って話しやすいからつい答えちゃった！」

「お褒めいただきどうも……って呼び方」

「笠原くんだと環と被るし、アタシはキミが気に入ったし」

「はあ……」

えー、これ絶対（恋愛ルート）入ってるよね？

流石にチヨ口過ぎない？

沙春ちゃんですら一週間持ちこたえたんだぞ。

「ん、笠原。電話鳴ってるよ」

須川先輩に指摘されスマホが鳴っていることに気付く。

液晶には『沙春ちゃん』と。

「もしもし沙春ちゃん？」

『あつ、とーは。ごめんなさいまだお食事中でした?』

「あ、こつちこそ連絡しなくてごめん。今飲み過ぎた先輩を送ってきたところ。もう帰るよ」

『べ、別にとーはがいなくても寂しくくないですし!』

うわ、ウチの姪かわいすぎ……。

寂しいかなんて僕一言も言っていないのに自爆してるよ。

「……というわけで帰ります」

「ん、彼女が待つてるなら帰らないとね」

「彼女じゃないですけどね」

彼女にしたくはあるけど。

そして、青少年なんちゃら法で刑務所行きだ、やっほい!

「お邪魔しました」

「ん、また大学でねー」

「はい、先輩方にはお世話になります」

そう言っで見送ってくれた須川先輩に礼を言い部屋を後にする。

あ、そういえば。

「コンビニ行き忘れたし、先輩に同じマンションなのも言い忘れた」

代わりに沙春ちゃんを超甘やかしましたとき。

姪っ子とまったりしない休日（性的な意味で）

「服を買いに行きたい？」

新入生歓迎会という名の飲み会を終えた次の日。

沙春ちゃんは半日登校、僕は講義無しということで家で昼食を食べていた。

ちなみにメニューはミートソーススパゲティ。

ミートソースはスパゲティの王者だと思う。

異論は認めない。

「はい。前から行くこうとは思ってたのですが中々タイミングがなかったのですね」

まあ確かにここ最近入学式関連で忙しかったりする。

スーツを買いに行ったり、書類を書いたり、ラジバ……。

「あつ、まだこの前買ったパンツ見せてもらってない！」

「バカですよね、とーは！」

パンツ見たい（超真面目）。

やってきました、イオン！

はっ！か、さんじゅうにち、ごぱーせーんとおっふっ！

だが今日は4月6日ですー。

「とりあえず銀○こ食べよう！」

「さつきお昼食べたじゃないですか！」

銀だ○って美味しいよねー。

「食べ物を買ってからですっ！」

「えー」

沙春ちゃんに引きずられ上の階へ。

流石に県内随一の商業施設だけに服屋だけでもかなりの数がある。

そして人が多い、吐きそう。

「で、どんなブラ買うの？」

「買いません！というか必要ないです！」

つるぺたまないだもんね、沙春ちゃん。

いや小4なら普通なんだろうけど。

まあ、セクハラもといスキんシツプはこのくらいにしておこう。

そう思いレディースの服売り場に行こうとすると、なぜか沙春ちゃんに裾を引つ張られた。

「どこに行くですか、とーは？」

「え、だからレディースの服売り場に……」

「そつちじゃなくてこつちですよ」

そう言って沙春ちゃんが指を差したのはーメンズ服の売り場だった。

「……まさか」

「はいっ！」

にっこり笑った沙春ちゃんが言った。

「今日はとーはの服を買います！」

まーじーでー。

「うーん、これはちよつとイマイチですかね……」

はいどーも皆さんこんにちは。

冬葉ですあいあいあい。

今日も沙春ちゃんの着せ替え人形やっていきたいと思います。

……うん、軽く現実逃避してみたけど無理だった。

「これは……柄はいいですけどちよつと大きいですね」

かーえーりーたーいー。

何で女の子ってこんな面白い物長いんだよ。

着せ替え人形とか成人間近男性がやる仕事じゃないだろー。

「もうっ！とーはも真剣に選んでくださいよ！」

「はい、帰りたいたいです」

「却下ですっ！」

即却下された、ひどくね？

「とーはももう少しおしおしやれに興味を持つべきです。いつもジャージかパーカーじゃないですか」

「楽だからねえ」

出掛ける時はパーカー、家にいる時はジャージが僕の日常だったりする。

どっちも持つてるのは3枚ずつだが別に困ってないし。

「その……」

「ん？」

あれ、何で顔が赤いの沙春ちゃん。

なぜか少し口ごもった後口を開く。

「と、とーははその……結構カッコいいんですからそれなりの服を着ればもつとよくなると思いますよ……」

聞きました奥さん？

ウチの子、僕のことをカッコいいと思ってるみたいですよ？

ここはクールに返すのがイケメンでしょ？

「えつと……ありがとう？」

「は、はい……」

いや照れてどーすんの、僕!?

お見合いかっ！叔父と姪の癖にお見合い気取りかっ！

ここはなんとか誤魔化さないと……

慌てて近くの服を適当に取る。

「あつ、この服いいねっ！」

「え……。そ、それですか……？」

「うん、最高だよ！」

肉体をより美しく見せる光沢のある黒。

妖艶に、それでいて華美になりすぎないレース。

胸元を締め付け過ぎない整った形。

これぞ最高の brassiere ブラジャー！

……わーい刑務所が近づいたぞお。

「あ……ああ……」

「いや違うんだよ沙春ちゃん！」

そもそもなんでブラがここにあるんだよ！

メンズブラならまだしもガチブラじゃんか！

ガチブラって街ブラみたいだね、ってバカ！

「そ、その……趣味嗜好は自由だと思えますけど」

すんごい気を使われとるー!?!

自由じゃねーよ、男がガチブラ着けてたら即逮捕だよ！

「と、とーはが買いたいなら別に……」

「ごめん適当に選んだだけだから！頼むからもうやめて！」

ブラはちゃんと元の場所に戻しましょう！

お兄さんとの約束！

なんやかんやあつて夕方。

あの後、春夏用のジャケットとかシャツを買って僕たちは帰路に立っていた。

おしやれさんの沙春ちゃんから見ても合格点らしい。

「でも良かったの？こんなにいっぱい買ってもらっちゃって」

今回の買い物で僕は1円も出していない。

数万円の出費を誰が出してくれたのかーはほぼわかってるけど急だったから驚いたのは本当。

「いつもお世話になってるとーはへのお礼……ってお母さんが」

やっぱリスポンサーはお姉ちゃんか。

まあ、沙春ちゃんの周りで何万も出してくれる人に心当たりがなかったってのもあるけど。

「お姉ちゃんのことだから何倍もの見返りを求められそうだけど」

「……すいません、否定できません」

あの人普通に『お礼に明日大統領暗殺してきて♪』とか言いそうだから怖い。

……暗殺って準備が大変なんだけどなー。

「まあ、ありがとう沙春ちゃん。大事にするよ」

「……別に大事にしてくれなくていいです」

はい、ツンデレ入りましたー。
ウチの姪はやっぱり可愛い。

居眠り花猫（前編）

というわけで今日から授業である。

1限、2限、昼食を挟んで4限、5限の予定だ。

いやあ本当に。

「かーえーりーたーい!!」

思わず叫ぶと近くを歩いていた女性がドン引きしたように立ち去る。

大丈夫、冬葉くんは人畜無害ですよー。

強いて言うなら、姪っ子にセクハラしたり、裸を見たり、おっぱい先輩のおっぱいをガン見したり……。

あれ、もしかして僕人畜無害じゃなくね？

そんなどうでもいいことはさて置き大学の話だ。

ここの大学は1限が90分なのだが、よく考えて欲しい。

90分も学校という絶望の牢屋に拘束されるのである。

それはさながら大犯罪を犯した咎人と同じ。

……おっと中二病が溢れてしまった。

だから僕はこの学歴社会に一石を投じたい！

学校なんか行かなくても有能な人材はここにいるんだ！

僕は……負けない!!

まあ。

「……であるからして……ここはある種の分岐点だったのだ」

普通に授業受けるんですけどね。

所詮は学歴社会、真面目に頑張るしかないのだ。

それに、サボって帰ると沙春ちゃんに絶対怒られる。

朝も彼女が登校する前に告げられたのだ。

『言っておきますけど、大学休んだらとーはのこと嫌いになりますか』

『ら』

うわっ……僕の信用度低すぎ……。

とはいえ、沙春ちゃんに罵倒されたり、呆れられたりすることが多い僕でも嫌われるのは避けたい。

セクハラという法的ギリギリ(?)なことをやっている以上、嫌われたら逮捕エンドもあり得るのだ。

怖いネ、青少年なら条例っ！

だが90分も真面目に受けるのは僕の性格上無理。

そこで考えた作戦が、名付けて。

『授業中だけ教科書を立てて寝ればバレないよね作戦』である。

居眠り研究家が考案した古来より愛されるこの方法なら1時間程度なら乗り越えることができるのではなからうか！

ーだがそのためには最大の障害があった。

「ぐぐおお〜！」

それは僕の後ろから聞こえる音。

もつと言えばイビキだった。

「ぐがああ〜！」

うるさいなあ!!

これ、普通に授業受けようと思っても邪魔過ぎるよ！

だからか、この教室そんなに広くないのにこの長机の周りだけ誰もいなかったのは！

「おがああ〜！」

Z O ・ N ・ B I ・ K A ・ Y O !!

なに、僕の後ろバイオがハザードしてるの!?

「ぐぐっ!!…んう〜」

あ、起きたっぽい。

…え、というか今の声って。

「…二度寝するか」

「いや、起きろよ!!」

思わず振り向いてツッコむ。

そこにいたのは。

「ん…誰?」

ー眠い目を擦る美少女だった。

あと、声超可愛い。

「おい。授業聞く気がないなら出てけ」

「あ、はい」

……というわけで追い出されましたー。

いや、なんで僕だけなんだよ。

僕よりあの子の方がうるさかっただろ。

と、終業の鐘が鳴った。

少しして生徒たちが出てくる。

その中にさっきの彼女がいた。

「ふあ〜。ん？あ、キミはさっきの」

あくびしながら出てきた彼女は僕に気付いたか歩み寄ってくる。

改めて彼女を観察するとさっき思った通りの美少女だった。

白銀色の長いストレートの髪に小さなヘアピン。

眠気で半分閉じた目すら可愛らしさに変える顔。

身長はかなり低く、沙春ちゃんより僅かに高いくらい。

……そしてなぜか緑ジャージにサンダル。

何というか、服で全てを台無しにした美少女だった。

「授業中に騒ぐのは感心しないぜ」

「いや君に言われたくないんだけど」

なんか注意してきたんだけどコイツ。

え、マジでなんなん？

「ハナは許可得て居眠りしてるもーん♪」

「許可得てって……」

「高橋君はロリコンだから、ハナには怒れないよ」

「ええ……」

さっきの先生高橋講師のあまり知りたくなかった事実を知らされた瞬間だった。

と、気になる言葉があった。

「君はもしかしてこの大学の教授の娘とか？」

講師を君付けするところと若干偉そうなところからそう聞いてみる。

すると、彼女は悪戯っぽく笑った。

「んー、もつと上かな？」

「もつと？教授より上って学園長？」

「お爺じゃん!?その娘ってハナがそんなおばさんに見えるってか!!」

いや見た目的にはJSっぽい感じだけど。

というか、この子小さい割にガラ悪いな。

「じゃあ次の授業あるから僕は行くよ」

時間はまだ少しあるけど、この子と話して疲れたしちよつと休みたい。

だが彼女はなぜか不満そうな顔。

「えー、もうちよい話そうぜ！」

「いや授業があるって」

「ちよつとだけだって！先っぽだけ！」

「女の子がそんなこと言わないの。というかそのジエスチャーやめい」

見た目ロリが下ネタとかマジでやめて欲しいんだけど。

沙春ちゃんがこんな風に育たないように気をつけよう。

彼女は僕に引っ付いてくる。

そして上目遣い。

「ホテル行こつ！ハナのテクニクを見せてやるぜ」

「君をホテルに連れて行ったら僕が逮捕されると思うんだけど」

というか、なんでこんなに気に入られたんだろう。

僕的にはビッチ系とか全然好みじゃないんだけど。

あ、ホントに時間が無くなってきた。

「じゃあ授業あるから」

「むう……」

歩き出すと、彼女は不満そうな声を出しつつも何もしてこない。
やれやれ……変な人に巻き込まれたものだ。

「……であるからしてこの数式の解き方は」

「知ってた？山本くんってズラなんだぜー」

「……」

……何かいるんですけどー。

え、マジでなんでなん？

なんなのぜ？

「……xを代入する前に私はズラではなくこれはただのヘルメットだと説明したい」

「略してズラメットだな！」

ぶほっ!?

今のはちよつと面白くて吹いてしまった。

やばっ、山本講師こっち見てるし。

別に真面目に受ける気は無いとはいえ、2限連続で退場は避けたい。

「えつと、できれば黙ってくれろと嬉し「嫌だ！」……んだけど」

食い気味やめい。

人の話は最後まで聞く、これ冬葉お兄さんとの約束ね。

「わかったわかった。授業が終わったら君と遊ぶから。だから今は勘弁して」

「ホントだなっ！じゃあ今は我慢する！」

そう言っただけで彼女はカバンから本を取り出し読み始めた。

やれやれ。

「……ようやく静かになった」

そうして手に入れた静かな環境で、ようやく僕は。

「……おやすみ」

睡眠学習を謳歌するのだった。

……この後苦しむことになるのも知らずに。

居眠り花猫

この大学の飲食スペースは食堂と喫茶店がある。食堂には、定食や軽食などいわゆる定番のメニューを出してくれる。

朝から夕方まで解放しているというところで、食事時は勿論、次の講義までの空き時間で来る人もいるとのこと（by 桜井先輩）

次に喫茶店だが、ここは学長の趣味で経営していてぶつちやけ全然お客さんは入ってないらしい。

また値段も高く、コーヒー1杯で日替わり定食3食分とのこと（by 須川先輩）

まあ、学生の身分で入るような店ではないね。

……と、10分前の僕なら思っていただろう。

『それでメイったら』お嬢様エクレアで掃除はできません』って。オマエは蕎麦屋か！って感じだよな！』

「あはは……」

オシャレなBGMは彼女のマシンガントークで完全にかき消されていた。

個人的には中々来ることはないだろう店内を観察したり、料理を参考にしたいところなのだがどうやらムリぽだろう。

「じゃあシュークリームならどうだって言ったらなんて答えたと思う？」

「なんででしょうねー」

『お嬢様は一度脳外科を受診されたらどうですか？』って。ハナはリサイクルシヨップかっ！』

誰か知らないけどメイさんグツジョブ。

そして彼女のツツコミは世界観がちよつとおかしかった。

授業が終わった瞬間に『じゃあ行こっ！』と教室から連れ出された僕は、いつのまにかこの喫茶店に来ていた。

それから10分。

僕は彼女のトークに乾いた返事を出すだけの機械になっていた。

・・・沙春ちゃん、僕汚されちゃったよお。

「お待たせしました。アールグレイとクリームソーダです」

喫茶店唯一の店員らしいマスターが飲み物を置いてくれる。シルバーの髪と口ひげがまさにダンディなマスターだった。

だからマスター！僕をここから逃がしてよ！

そんな同情的な目とかいらんから!!

「わふっ！ハナこれが大好きなんだ！」

「そうなんだ」

飲み物のおかげか、ようやくトークは落ち着いた。

メロンソーダの上のアイスを食べた彼女が蕩けそうな顔をする。

「おいひい〜！」

そんな顔を見ると子供っぽくて可愛いんだけどね。

まあ彼女が何歳か知らないんだけど。

あ、そうだ。

「そろそろお互い自己紹介しない？」

「え、してなかったっけ？」

「僕の記憶が確かならね」

というか数時間前に会ったばかりの名前も知らない女の子とサシで飲んでるってどういう状況だよ。

イタリア男か、僕は。

「えー、でも普通に今のまんまでも良くない？ジョンってあだ名いいと思うよ？」

「誰がジョンだ。というか君からジョンなんて一度も呼ばれてないよ。後、僕は日本人だからね」

ああもうツツコミが疲れる。

帰ったら沙春ちゃんにセクハラとボケまくろう、よし決めた。

仕方なく僕から自己紹介する。

「教育学部1年、笠原冬葉。そっちも名乗ってよ」

だが、彼女はなぜか困ったように笑うだけ。

特に僕は口を挟むことなくただ見てみる。

「あっ！・・・えっとハナも教育学部だぜ！」

「・・・悪いけど君を歓迎会で見た記憶がないんだけど」

すぐに自由席状態になったとはいえ最初の数分は学部ごとに並んでいた。

人数が多くてもこれだけの美少女を見落とすはずがないだろう。

そう指摘すると明らかに彼女は狼狽えた。

「そ、その・・・休んでたからっていうのはどう？」

「僕に聞かれても」

まさかの苦笑いで僕に聞いてきた。

というわけで嘘確定だった。

じゃあ、この子は誰だということになるわけで。

「ま、別に誰でもいいんだけどね」

「・・・おう？」

そう言っ僕が紅茶を飲むと、彼女は変な声を上げた。

うん、この紅茶結構うまい。

と、彼女はそろそろと手を上に伸ばした。

いわゆる拳手のポーズだ。

「あの・・・ハナのことともういいの？」

「え、何が？」

なぜか彼女はさつきより狼狽えていた。

え、なんでなん？

「だ、だって！ハナがこの大学の生徒じゃないって気づいたんだろ!？」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「あ!？」

いや、何か作戦に引っかけたかかったみたいなの顔してるけど君が勝手に言ったんだからね。

「別に君がどこの誰がだろうが興味ないし」

「興味ない!？」

「うん。興味ないし、メンド臭いし、財布忘れたし」

「財布はハナ関係なくない!？」

あ、マスターの顔が何か厳しくなった。

大丈夫、紅茶代くらいポケットに入ってますから。

「よく知らないけど、君は『ハナ』って女の子なんでしょ？僕はそれだけ知ってればいいんだけど」

そう言うとな彼女は口をあんどり開けて僕を見た。

え、何なんか変なこと言った？

「さつき自己紹介しようって言ってたじゃん!？」

「してもいいけど、ウチの業界の自己紹介って名前年齢身長体重、今付けてるブラとパンツの色まで言ってもらうからね」

「その業界怖すぎるなっ!？」

まあ見た目的にブラは微妙そうだけど。

というかちゃんと普通のツツコミできるじゃんこの子。

「…なんというか。すごいなキミ」

「そう?つとそろそろ講義だから僕は行くよ」

スマホの時計を見ると講義開始20分前。

移動時間を含めるとそろそろ出た方がいいだろう。

立ち上がると、なぜか彼女は手を僕の方に伸ばしてきた。

なぜか右手にスマホを持って。

「……くれるの?」

「違うよっ!連絡先交換しようってこと!」

「あーごめん。僕スマホ持ってないんだ」

「さつき思いつきり使ってた気がするけど!？」

というわけで、僕のアドレス帳に名前が一個増えることになった。

「また一緒に遊ぼうな、ふーは!」

につこり笑う正体不明の少女――ハナさんの名前が。

あと、僕の名前冬葉とうはだから。

笠原冬葉と大谷智希の距離感

「トモ、今日ウチ誰もいないから来なよ」

ある日の授業終わり。

私こと大谷智希は友人の男の子から声をかけられました。

彼の名前は笠原冬葉くん。

私はフウちゃんって呼んでいます。

私は今のフウちゃんの言葉を意味を考えます。

多分、というか今の言い方はわざとだから……。

「ウチって……どっちの？」

フウちゃんには家が2つあります。

1つはフウちゃんが実家って呼んでる家。

中高の放課後によく遊びに行きました。

あ、ちなみに今のフウちゃんの言葉の意味は『今日ウチに誰もいないから』遊びに”来なよ』だと思います。

お互い恋愛感情なんて1ミリもない癖にこの言い方はどうかと思います。

「別に実家に行ってもいいけど今からじゃ帰りが夜中になるよ」

「フウちゃんのおウチ、久々に泊まるねえ」

「泊まる気かい。んなことになったら父さんたち同室に寝させようとするからダメ」

おじさんもおばさんもよく可愛がってくれたっけ。

『いつ冬葉と入籍するんだ？』って聞かれて『はあ？』と答えたらなぜか引かれたんだっけ。

「私は同室でもいいよお？」

「僕が色々我慢できなくなるからダメ」

「フウちゃんがその……シてる間は目を閉じてるから

！」

「ハハッ、コイツ聞く気マンマンやん。というか、同室までしといてセルフプレイなん？」

およそ異性間とは思えない会話ですが、小学生の頃からこんな感じ

なんです。

前はもつと無口で物静かな子だったんですけどね。

でも私は今の優しくてちよつと意地悪なフウちゃんが大好きだったります。

「それなら……私が手伝ってあげようか？」

「あ、ごめんトモ。僕背が低くて巨乳の子じゃないと無理だから」

「完膚なきまで私と真逆だよお!!」

やっぱり優しくないです！

超！超！ちよー意地悪です！

「むう〜！」

「いつまで怒ってるのさ？」

「フウちゃんが意地悪しない心優しい男の子になるまで！」

「マジか。じゃあ一生無理なんだけど」

「少しは改めようよお！」

線路沿い家までの道を缶ビール……じゃなくて缶ジュースを片手に歩く僕と智希。

会話の自身はこの炭酸飲料の如く無果汁。

さつき自販機で僕が奢った（ここ重要！）のだが、機嫌を直すには至らなかつたらしい。

ダ○ドーさんにはマジで120円返して欲しい。

「トモだから意地悪しちゃうんだ……。トモのことが好きだから……！」

「フウちゃん……困ったら告白する癖やめようよ」

わーい、超真顔。

勘違いしてほしくないけど、テキストに告白するのは智希に対してだけだから。

沙春ちゃんとか桜井先輩に告白するなら、高級ホテル貸し切りするまでである。

「トモのことは大好きだよ。異性としてじゃなくて親友としてだけ

ど」

「はあ……。私もフユちゃんのごことはお友達として大好きだよお」
すごいね、お互い両思いだとわかったのにーミリも照れが来ない。
そしてこれは許してもらえたのだろうか。

「あつ、でもー意地悪なフユちゃんはあるまり好きじゃないよお！」

……許してもらえたのだろうか？

いや、許してもらえたと思おう！

ケンカ、イクナイ！

「で、おウチってフユちゃんが居候しているお姉さんのおウチなんだよね？」

「その通りだけど、居候って言い方はやめてくれる？」

私の問いに若干嫌そうな顔をしつつもフユちゃんが答えます。

そう言えば、とフユちゃんが口を開きます。

「トモはお姉ちゃんと会ったことあつたっけ？」

「ないよお。フユちゃん家に行った時も会わなかったし」

フユちゃんと仲良くなった頃にはお姉さんはもう結婚して実家を出ていたみたいです。

もちろん女優さんであるお姉さんのことは知っていましたけど。

似てるなあと思っていました、姉弟だと聞いた時にはびっくりしたものです。

「アレでも結構忙しいらしいから。個人的にはなんであんなのが人気あるかわからないけど」

「あはは……。結婚したい女優と結婚したくない女優の二冠殿堂入りだっけ？」

「そうそう。したくないの方を知らなくて事務所にお祝いのケーキ差し入れたら……。よそう思い出したくない」

お姉さんはフユちゃんと同じで飾らない性格です。

それだけに慕ってくれる人も多いですが、敵も多いと前にフユちゃんが言っていました。

でもフウちゃんとお姉さんはとっても仲良しです。

フウちゃんはお姉さんが出てるテレビを全然見ないから知らないかもしれないが、たまにバラエティに出るとよくお話してるんです。

マイペースでめんどくさがりで天然タラシで……そして、とても優しい”弟”の話を。

「……ねえ、トモ。何でそんな慈しむ目で僕を見てるん？」

「んーん、フウちゃんはやっぱり優しいなあって♪」

「……ならトモ、優しい僕に今日のパンツの色を教えなさい」

「白と黒のシマシマだよお」

「いや、言うんかい」

未知との遭遇くロリとJDを添えてく

「ここがお姉ちゃんのマンションだよ」

というわけで、やってきました初島家。

智希はポカーンした顔でマンションを見ている。

あー、1ヶ月前の自分を思い出すわー。

「何というか……すごいねえ」

「トモのウチも中々だと思っけど」

「比じゃないよお〜」

智希の親は検事と弁護士で、家もそれなりの豪邸だったりする。

まあ智希の家は豪華というよりセンスがある家という感じだ。

お金持ちとしての気品はありつつもイヤらしくないというか。

あ、イヤらしい女の子は大好きです。

智希の親、つまりおじさんとおばさんは一言で言うなら”非常識人”だ。

具体的には、小学2年生時代の僕にノンアルコールビールを飲ませたり。

夫婦喧嘩でおばさんが家出し、なぜか小学5年生の僕を母親代理として家事させたり。

おばさんに夜のプロレスごっこのための下着を、中学3年生（受験の3日前）の僕と一緒に選ばされたり。

ぶっちゃけこんな人たちが罪を裁く立場にいることに驚きより不安を感じる。

後、智希みたいなマトモな子が産まれたことも個人的にはかなり驚きだ。

大谷夫婦の話はさておき、エレベーターに乗り部屋の前へ。

一応下でインターフォンを鳴らしたが、沙春ちゃんはまだ帰ってないらしい。

まあ、まだ昼過ぎだし友達を呼ぶ許可も得てるのだが。

「入って、どうぞぞ」

「お邪魔します〜」

「悔い改めてー」

鍵を開けて彼女を招き入れる。

小ネタはスルーされ……あ、違う微妙に睨まれてる。

すいません、自重します。

リビングを通し、沙春ちゃんお気に入りのロイヤルミルクティーを入れる。

「わあ、フユちゃんのミルクティー久し振りだあく♪」

「スーパールの茶葉だからトモの口に合うか分からないけど」

「むしろ、スーパールの茶葉でよくウチのメイドさんより上手く淹れるよねえ」

そこは経験の差といいますか。

彼女好みに少し熱めに淹れたお茶をふうふうと息を吹きかけながら飲む。

すると”ほにやあ”と擬音をつけたくなる顔になった。

実はこのロイヤルミルクティー、そもそものきつかけは小学生の時智希と観ていたアニメがきつかけだったりする。

アニメで出てきたのを智希が飲んでみたいと言ってたので誕生日プレゼントにしたのだ。

「最初のはひどかったなあ。白いのをどう出せばいいか迷って小麦粉ぶち込んだら変な塊が出来上がるし」

「あはは……。小学生の頃のフユちゃんって変な思考回路してたよねえ」

「は？何で昔のこと知ってるの？ストーリーカー？」

「幼馴染だからだよお！」

そんな感じで、ミルクティー片手にボケボケの会話をしていると鍵が開く音がした。

急いで僕は玄関へと走る。

「お帰り、さはふごはっ!？」

さはふごは【名】……初島沙春の名前を鳩尾に前蹴りをくらいながらの呼称。

なぜか脳内広辞苑に1ページが足された瞬間だった。

「トーは、いきなりなんですかつ！」

いや僕もなぜかはわからないけど、ご主人様が帰宅した時の犬の気持ちになってしまった。

つまり、きみは○ツト状態だ。

石○さとみはやっぱりかわいい。

「い、いきなり蹴るのもどうかと思うけど……」

「自業自得ですっ！」

ぐう正論だった。

アレだね、日頃の行いって大事だね。

……あ、パンツ見えた。

「えっと……どういう状況かなあ？」

うつ伏せになっているので全く見えないが、智希の戸惑った声が聞こえた。

よし、ここで智希の紹介で、抱きついてチューしてベッドへGOしようとしたことを誤魔化すんだ！

「も、もしかして……大谷智希選手ですか!？」

そう、大谷智希選手の紹介を……って。

「うん、そうだけど……」

「わ、私大ファンなんです！さ、サインとかいただけませんか!？」

「いいよお。……はいどうぞ」

「やったあ！家宝にします！」

何かすんごいバイブス上がった姪っ子の姿がそこにはあった。

おーい、叔父さんがまだ倒れているよお。

そこで僕は思い出した。

沙春ちゃんと智希、2人の共通点——空手のことを。

「ごつちでお話ししましょう！大谷選手に質問したいことがいっぱいあるんですっ！」

「いいよお。あつ、フユちゃんにミルクティー淹れてもらおつか」

ワイワイと話をしつつリビングに戻っていく彼女たち。

床に落ちた変態大学生こと僕を放置して。

ちなみに何かは言わないけど、水色の星模様でした。

幼馴染というものは

昼下がりのリビング――。

姪っ子とイチヤイチャアハーンな日々を送っているリビングには、楽しそうな声が響いていた。

「準決勝も感動しました！20センチも大きい相手を倒しちゃうなんて！」

「あれはねえ、攻めるじゃなくてカウンターで勝とうと思って……」

みんなー、全自動ミルクティー製造マシンの冬葉くんだよー！

今日も女の子2人の会話に華を添えるべく紅茶を淹れてるよー！

……うん、現実逃避はやめよう。

さつきも言ったが、この2人には共通点があった。

それは空手、しかも沙春ちゃんは小学生の準優勝で、智希は高校生の優勝。

ランクこそ違うものの、どっちもかなり強い選手だった。

当然会話も空手一色で、経験のない僕は入っていきげず。

……通信空手やろうかなー。

「……フユちゃんってばあー！」

「ん？」

ユ○キャンに登録しようか悩んでいると、智希から呼ばれた。

何回も無視してしまったのか、少し怒った顔をしている。

「ミルクティーお代わりお願い〜」

「……はいなー」

2人からカップを受け取りキッチンへ。

いやマジで僕、全自動ミルクティー製造マシン化してね？

なんてことを考えてると、誰かの人影が見える。

「相変わらず温度とか銘柄とか気にしてるんだねえ」

「トモ？どうかした？」

なぜか智希がキッチンまでやってきた。

沙春ちゃんとの話は終わったのかな。

「沙春ちゃんに電話が来たから、今のうちにさつき買ったケーキを出

そうと思って」

「ああ、じゃあそこに置いて」

「ここまで来たし手伝うよお」

そう言ってポットののお湯でカップを温めてくれる。

幼馴染だからか、僕のやり方は熟知してるらしい。

暫し無言の時間が続く。

と、智希が口を開く。

「・・・ホントはね、フユちゃんが姪っ子ちゃんと生活するって聞いて心配だったんだあ」

「心配って、僕そんなに信用ないの?」

「生活力は信用してるよお。でも性格はねえ・・・」

「性格は?」

「だって意地悪で悪戯っ子だし」

クスクスと笑う智希。

智希に何か意地悪した記憶はないけどなあ。

なんか悔しくて僕も言い返す。

「まあ、沙春ちゃんには毎晩ベッドで悪戯してますから」

「そーなんだー」

「トモもどう? 3人同時プレイも楽しいよ?」

「あはは、経験ないくせにいい」

すんごい軽く流された。

沙春ちゃんを始め、女の子にセクハラするのが大好きな僕だが、智希相手にセクハラは中々うまくいかなかったりする。

いや、ちつぱいとかひんにゆーとかセクハラポイントはあるんだけど、何か達成感というか、『うまくいった!』っていうのがないのだ。

まあ答えはわかっている。

幼馴染だ、親友だって言ってみても所詮は異性。

フツーに僕は彼女を”カッコをつけたい”女の子と見て意識しているだけだった。

「・・・なあトモ」

「ん、なあに?」

「僕がもし……トモのことが好きだって言ったらどうする？」

これを告白を取るかは自由。

だけど、なんとなく言いたくなかったのだ。

キョトンとした顔の智希。

指を口に当てる顔には、一切の照れはなく。

「多分……すっごく嬉しいと思うけど」

ーなんじゃそりゃ。

というか、少しくらい顔を赤くしなよ。

「思うって何よ。そんな人ごとみたいに」

「だって、フユちゃんが告白するの想像できないし」

「あ、言ったな。僕にかかればハニー〇ークスもびっくりの恋愛模様作ってみせるよ」

「フユちゃんって意外とああいふ青春っぽい好きだよねえ」

結局いつものやりとりに戻る訳で。

結局僕は彼女が好きなのかどうなのかはわからないままな訳で。

何というか、こういう所が幼馴染の悪いところだと思う。

『家族的な』好きと『恋愛的な』好きがよくわからなくなってくる。

「はい。飲み物は持つから、ケーキは持つてよ」

「はーい♪フユちゃんはどれにするう？」

「沙春ちゃんとトモが選ばなかったのでもいいよ」

ーまあ、暫くは居心地のいい親友以上恋人未満で行こうと思う。
大学卒業までにはまだ長い。

ゆっくりと答えを見つけていけばいいのだ。

そして夕方。

ゲームやおしゃべりで時間はあつという間に過ぎ、智希を帰さなきゃいけない時間になる。

「本当に送ってかなくていいの?」

「うん、近くに迎え来てくれるからあ」

疲れたのか少し眠そうな沙春ちゃんが玄関から出てくる。

「大谷選手……じゃなくて智希さん。また来てくださいね」

「冬葉叔父さんが許可してくれればだけどねえ」

「……とーは?」

「いや、勝手に僕の好感度下げるのやめてくれない?というか、今日僕が誘ったよね」

僕のこと意地悪とか言う割には智希も結構だと思いが。

後、同い年におじさんと呼ばれるの嫌過ぎるんだけど。

「じゃあ、また明日ねえ」

「じゃあなー」

フリフリと手を振って大通りの方へ歩いていく。

それを見送って、沙春ちゃんの方へ向く。

昼間の智希のようにキョトンとする沙春ちゃんに思わず笑いがこみ上げる。

「え、なんですかとーは?」

「んー、昨日雑誌で見た全裸透視の練習してるだけだから気にしないで」

「気にしないわけじゃないんですけど?!」

セクハラしつつ、夕飯のメニューを何にしようか考えながら僕らは家に入るのだった。

帰りの車内。

私はさっきの彼の言葉を思い出していた。

『僕がもし……トモのことが好きって言ったらどう思う?』

幼馴染で、親友で、家族みたいな関係に恋愛感情なんて全くない訳

で。

だからー思ったことをそのまま言ってみた。

「嬉しい……。うん、きつと嬉しいだろうなあ」

少し照れたような彼の顔を思い出して。

私はニヤける顔を抑えられなかった。

新たな旅立ち（学生生活的な意味で）

「サークルを作りましょう！」

早いもので大学入学から1ヶ月が経った。

キャンパスライフに浮ついていた新入生諸君も段々と落ち着きを見せる今日この頃。

冬葉くんもどの講師なら寝てもいいのか、どの講師なら寝たらマズイのかわかってきた。

そんなある日、同じ講義を受けていた桜井先輩と須川先輩からお昼ご飯に誘われた。

食堂で談笑しつつBランチを食べ終え、熱い緑茶を飲んでいた時、桜井先輩が叫んだのだった。

はい、状況説明終了。

「サークルって部活的なアレですか？」

「はいっ！部活的なアレです！」

僕の質問に元氣よく答えるのは桜井環先輩。

心理学部に所属する2年生だ。

休日はボランティアをするのが趣味という顔だけでなく心も美少女な方だ。

それでいながら危なっかしきすら感じるポヤポヤさ。

もう、ポヤポヤの実を食べたのではないかというくらいポヤポヤしている。

あと、おっぱいが大きい。

というか、可愛い子が”アレ”って言うときい卑猥に聞こえるよね。

『笠原くんのアレをアレにアレして欲しいんです……』——ほらね、具体的なこと何一つ言っていないのに意味深過ぎるでしょ？

「……多分だけど笠原。アンタまた下ネタ考えてるでしょ？」

ジロリと僕を睨むのは須川育先輩。

僕や智希と同じ教育学部の2年生。

ギャルっぽい見た目は決して僕の得意なタイプじゃないが、短い付

き合いでもこの人が実は面倒見のいい先輩だということがわかつている。

ただ授業中寝たり、桜井先輩を性的な目で見ていたせいで、今は僕のお目付け役的な立ち位置にもなったりする。

うとうとしてると、隣から耳に息を吹きかけられたり悪戯的な起こし方をしてくるのだ。

前に一度僕の息子くんが元気に挨拶しそうになって抑えるのが大変だったのだ。

「ふっ。先輩。貧乳の嫉妬はみつともないですよ」

「よし、〇す」

……美人で美少女で美乳の須川先輩から頬をつねられる僕だった。

「ほっぺにいたい……」

「自業自得でしょ」

おっしやる通りで。

というか、罰がほっぺをつねるだけって可愛いな。

そんな中放置されていた桜井先輩が口を開く。

「あの……さっきのどこが下ネタなん」よし、サークルの話しましょう
「!……ふえ!」

桜井先輩の言葉をぶった切って話を戻す。

いやだつて、(恐らく)純粹無垢な桜井先輩に下ネタを解説するとかダメでしょ!?

沙春ちゃん? いや、あの子意外と脳内ピンクだから。

「サークル作るのはいいけどアタシはバイトもあるしほとんど参加できないわよ?」

サークルをの話に戻すと、須川先輩がそう言う。

そういえば、新入生相談会の時もバイトしてるって言ってたっけ。

「大丈夫だよ、そんな厳しいサークルにするつもりはないから」

「それなら、まあ」

須川先輩が納得したあたりで僕も手を挙げる。

「ちなみに僕も参加してもいいですか?」

「もちろんですっ!」

もちろんされた。

まあ、僕の目の前で喋っているのにお前は駄目って言われないうとは思ったけど。

そして、当然気になることがある。

「で、何のサークルなの？」

須川先輩が聞く。

その質問に、桜井先輩はニツコリと笑って。

「まだ決めてません！」

……マジかー。

というわけで、昼休憩後の本日最後の講義を終えました。

まだ夕方の講義があるからか、人もまばらな食堂に再度集結する僕たち3人。

「それではアイデアをみんなでも出し合いましょう」

講義前に桜井先輩から何のサークルにするか考えておくように言われていた。

とはいえ、僕にとって講義は睡眠優先。

適当に2、3個考えただけだった。

「一応考えたけど、環はともかく笠原のことはまだそこまで知らないし、アンタの興味のあるサークルじゃないかもしれないわよ」

「大丈夫ですよ、先輩。僕もエ〇ゲ研究部とかそういうのしか考えてませんから」

「うん、アンタは脳内を研究してもらいなさい」

ちなみに僕の脳内は、”欲”がほとんどの”嘘”1割らしい(脳〇メーカー調べ)

性欲だったなら大正解だったけどなー。

ちなみに、桜井先輩は「エ〇ゲ？」とキョトン顔でハテナを浮かべていた。

ああ、説明したい！

説明して赤面したところを言葉攻めしたい。

「……無知シチュっていいよね？」

「まずは、私から出します」

なぜか某バラエティのように紙に書いてドンツと出す桜井先輩。

そこに書かれていたのは。

「……娯楽研究部？」

「はいっ！」

須川先輩と声を揃えて言う勢いよく頷く桜井先輩。

「……これアウトじゃね？」

「古今東西あらゆるゲームで遊びながら面白さを研究するのが活動目的です」

「……そういえばアンタ下手な癖に、ゲーム大好きよね」

須川先輩の言葉に、前にゲーセンで桜井先輩と偶然会ったときのことを思い出す。

確かあの時はUFOキャッチャーやレースゲームをやったはずだが……まあ、うん。

一言で言うとはひどかった。

「どうでしょうかつ！」

キラキラした目で見られると嫌だとは言えないわけで。

須川先輩と一瞬顔を合わせ、口を開く。

「いい、いいんじゃないでしょうか……」

と、とりあえず百合百合な展開は阻止しよう！

キマシタワー建設反対っ!!

環ちゃんも遊ぼう！

桜井環さんは大学の先輩で、僕が大学で一番最初に会話をした女の子でもある。

：：：実際は登校中に智希と話した気がするが、気のせいだ。

この先輩なのだが実はそんなに関わりは無かったりする。

というのも僕は教育学部で、彼女は心理学部。

学年どころか学部も違うので、共通科目以外ではほぼ顔を合わすことがないのだ。

まあ、大学なんてそんなもんかと思っていたのだが。

「きーみーがーいたなーっーはー♪」

：：：何かゲームをしながら歌ってる人がいるよー。

4月も下旬となったある日の大学帰り。

久しぶりにゲーセンに行きたくなった僕は駅前のちよつと大きめのゲーセンに来ていた。

ここまで説明オツケー？

そして、入り口の『和太鼓の超人』に目を向けると、カラオケかというテンションで歌う知り合いがいた。

というか、桜井先輩だった。

「ともだーちみーつけてーはなれーてあるいーた♪」

歌は結構、いやかなり上手いと思う。

正直カラオケで聴いたら聞き惚れるレベルだと思う。

だが。

『ノルマクリア失敗。くたばれカス〜』

このゲーム名物の罵倒が響く。

画面を見るとクリアゲージのわずか4分の1にも満たず、ゲームオーバーになっていた。

難易度は一番簡単なレベル1。

失敗するのが難しいぐらいだった。

「ふええ〜、これで5連敗です……」

いやこの難易度に5回も失敗してるのっ!?

じゃあせめて曲変えようよ!?

もりのクマさんとか、主食用パン（餡入り）マーチとかあるでしょ!?

正直無視したいぐらいだが、知ってる先輩が半泣きなのを放置するのも沙春ちゃんの教育もとい発育に悪い。

仕方なく彼女に話しかける。

「えつと……こんにちは先輩」

「ふえ?」

気の利いた挨拶が思いつかなかったので普通に話しかける。

振り向いた先輩が僕の顔を見て。

「あつ、笠原くん……こんにちはです」

わあ、いい笑顔ー。

そして振り向く動作だけで揺れるのですね、そこって。

「笠原くんですよー。先輩久し振りですね」

「同じマンションに暮らしているのに中々会わないですよね」

僕と沙春ちゃんが暮らしているマンションの1階に、桜井先輩と須川先輩がシェアハウスしていると聞いたのは3週間前。

それなりには家賃の高いマンションなのだが、1階はセキリユティ的な問題で学生の彼女たちでもシェアすれば何とか出せているとのこと。

「でも育ちゃんとはよく会うんですよね〜?」

ん、なぜジト目?

嫉妬されるほど好感度は溜めてないと思うけど。

「そりや学部も同じですし。それにあの人のバイト先がアレですし」
「わかってますけど〜」

羨ましいです、と呟いたのは果たして僕に対してかそれとも。

チラリと時計を見てまだ夕飯の買い物まで時間があるのを確認し口を開く。

「私……デートとかしたことなくて。多分つまらないと思いますけど……。そ、それでもよければ……」

ゆつくりと、だがちゃんと了承の言葉を紡いでくれる桜井先輩。
うん……やっぱこの先輩可愛いなー。

「デートというのは男が盛り上げる役目ですから。先輩は何も気にしないで楽しんでください」

「笠原くん……」

あー、恥ずかしっ。

とはいえ、ようやく桜井先輩は笑顔を見せてくれた。

「えっと、デート初心者で申し訳ないですが……よろしく願いします」

「こちらこそ。ちゃんとエスコートできるように頑張ります」

彼女の手を取りいぎ店内へ。

さあ、僕たちの戦争デートをはじめよう。

『10-0、ゲームセット！前世カラヤリ直セ！』

このゲーム名物の罵倒が響く中、桜井先輩は死・ん・で・い・た・。

「せんぱあああいっ!!」

僕は数秒前まで桜井先輩だったものを抱き抱えていた。

……あと数センチで豊かな胸に当たりそうだが超我慢して。

「笠原くん……ゲーム上手いですね」

「先輩……先輩が弱すぎるんです」

遡ること1時間前。

とりあえず桜井先輩がさつきまでやっていた”和太鼓の超人”をやってみることにしたのだが。

「あるひくもりのなか〜」

さつきも思ったが歌はやっぱり上手い。

しかし。

「先輩!?全然リズムに合ってませんよ!?!」

このゲームは流れてくる”赤”と”青”に合わせて太鼓を叩く非常にシンプルなゲームのはずなのだが、桜井先輩は全くと言っていいほどタイミングが合ってなかった。

ちなみに難易度はさつきと同じレベル1。

僕が遅過ぎてむしろやりにくいスピードに彼女は全くついて行けてないのだった。

『パーフェクト！まあ当然だけどな』

『ノルマ失敗！もうやめちまえよー』

どっちがどっちの評価かはお察し願いたい。

続いてやったのはレースゲーム。

僕があまりやらないジャンルのいい勝負になると期待したのだが。

「えっと、先輩。僕ゴールしちゃいましたけど」

「ふえ!?も、もうですか!?!」

僕が3周を終えてゴールする中、彼女はようやく1周目の半分というところだった。

壁などにぶつけると画面の車が凹んだり傷付く演出なのだが、彼女の車は廃車寸前という見た目だった。

『3位！普通だね』

『ビリ！貴様に免許を取る資格はない!』

どっちがどっちの評価（ry

最後にやったのはホッケーゲーム。

小さい頃以来ということもあり、どうにか勝たせてあげたいと思ったのだが。

「うにゃ〜!?!」

「ふわあ〜!?!」

「ふええ……」

はい、お判りいただけたかと思いますが圧勝でした。

須川先輩曰く、運動神経は悪くないとのことなんだけど……。

これでまだ、ゲーセン初心者なら仕方ないと思うが。

『和太鼓の超人は一番やり込んでるんです!』

『レースゲームなら得意です!』

『ホッケーはかなり自信あります』

はい、死亡フラグ一覽でございます。

話を聞くに彼女はゲーム大好きของเกม下手ということだろう。

「一回も勝てなかったです……」

「せんばあああい〜!!」

チクシヨウ、誰が桜井先輩をこんな目に!

SEO A かつ!

SOG A のヤロウ許せねえ!!

でもソ○ツクは大好きです!

「飴美味しいです〜」

夕方になり僕たちは帰りの道を歩いていた。

ちなみに白くなってしまった桜井先輩は、飴とかを落として取るゲームの景品のおかげで何とか復活しました。

もう少しで、NOeRの白い世界にでも行っちゃいそうな感じだった。

「ありがとうございます、笠原くん」

「別に飴ぐらいでお礼なんて」

「あつ、そっちじゃなくて。いえ、そっちもですけど……」

言葉を切った彼女に目を向けると、しっかりと目が合う。

そして。

「今日のデート、すっごく楽しかったです♪」

本日最高の笑顔とともにそんな言葉をかけてくれるのだった。

「……次はゲーセン以外にしましょうね」

「えっ!?! なんですか!?!」

「むしろ、あれだけボコられてよくまた行こうってなりますよね」
そんな雑談をしつつ、僕らは夕焼けの道を歩くのだった。

——そして10分後、買い物を忘れていた僕が元来た道を全速力で走るのだった。

姪叔父旅行Ⅱ新婚旅行という新解釈

「え、旅行？」

5月へ突入したある日の昼下がり。

ゴールデンウィーク中とのことで、ブツ〇オフでラノベまとめ買いをしてきた僕に沙春ちゃんが声をかける。

「はい、これがポストに入っていたんです」

ちなみに沙春ちゃんの部屋着はピンクのTシャツに青のスカートとシンプルながらも非常に可愛らしい。

パンツはローテーションを考えるに黄色のハート柄だろうか。

うん、気持ち悪いな僕。

え、僕の部屋着？

グレーのパーカーにジャージと超普通だよ。

「とーは、どうしたんです？」

「あ、ごめん。ちよつと意識が沙春ちゃんの黄色パンツに行ってた」

「意味がわかりませんです!?!あとどうして知っているんです!?!」

まさかの正解だったらしい。

スゲーな、僕。

セクハラはとりあえず置いて、彼女が渡してきた封筒をみる。

「なになに……」

封筒の中には温泉宿泊ペアチケットが一枚入っているだけだった。

温泉の場所は車で2時間弱の温泉地。

一応旅館の名前をオツケーグ〇グルしてみるが、ちゃんと実在するところらしい。

「よし、詐欺だな」

断定である。

どうせこの旅館に行ったら羽毛布団やらペ〇パーくんやら買わせるのだろう。

寿司屋でしか見かけないぞ、ペツ〇ーくん。

ペツ〇ーくんの存在意義を考えつつ、ゴミ箱へチケットを捨てようとした瞬間。

「……マジで？」

僕の視線の先には、着信音を鳴らすスマホ。

その音楽はあ・の・人・専用に設定ゴ○ラさんのテーマソング。てててーてててーててててー、ってアレだ。

ちなみに僕はゴ○ラさんの映画は一切観ていない。

この曲を知ったきっかけは日本一有名な下ネタ5歳児の映画だ。

温泉が舞台の話で、前に言ったオ○ナ帝国に負けず劣らず名作なので是非観て欲しい。

流石に伏せ字だらけになってきたのと、いつまでもこの恐怖を煽る音楽をリビングに流したくなかったのでスマホを手取る。

「へーイ、コニチワー！」

先手必勝とエセ外国人風で挨拶をかます僕。

電話先の相手は、面を食らったのか無言で……。

『……捻じ切るわ』

「ごめんなさい許してください申し訳ありませんお姉様」

はい、土下座である。

どこがかましたんだよ、完全敗北じゃねーか。

具体的にどこを捻じ切るかわかれてないのに、男性のシンボリックな部分が縮こまる。

「えっと、久し振りだねお姉ちゃん」

電話先の相手は我が姉上ことお姉ちゃん。

沙春ちゃんの母親にして、現在バツイチ(笑)の大人気女優である。

『ええ、たった1人の弟が撮影中一度も会いに来るどころか電話1つ寄越さなかったからね』

「大学あるのに京都なんて行けないって。ていうか、ナチュラルにもう1人の妹のことを忘れないの」

まあ、僕とお姉ちゃんと違って血の繋がりはないけどさ。

妹のことは関係ないのでさせておき。

いきなりの電話の要件は察しがついている。

『温泉のチケット送ったから沙春と行きなさいね』

「やっぱりお姉ちゃんだったんだ」

スピーカーにしていたから沙春ちゃんにも聞こえたようで、僕の方に近付いてくる。

「お母さん、こんにちは」

『あら、沙春は相変わらずちゃんと挨拶できる子ね。これも天才足る女優の私が教育した賜物ね』

「・・・お母さんは相変わらずだね」

自画自賛の極みだが、沙春ちゃんが礼儀正しいいい子なのは流石お姉ちゃんだと思う。

お姉ちゃんに似て腰のラインも小学生にしては非常にいやらしくて最高。

後は、おっぱいが桜井先輩並に育ってくれるのを祈るばかりである。

『とーは（冬葉）、また変なこと考えてるです（でしょ）』

目の前と電話先で一緒に指摘するのやめい。

考えてたけど・・・考えてたけどっ!!

『とにかく折角の休みなんだからたまには旅行でも行つて楽しんできなさい』

「そうだねえ・・・」

チラリと沙春ちゃんの方を向くと、一瞬目が合いすぐにそらされた。

まあ、その一瞬で彼女の気持ちはわかった訳だけど。

「了解、折角だし使わせてもらおうよ」

『そう。楽しんできなさい』

それじゃあね、と電話が切れる。

切れる直前、お姉ちゃんを呼ぶ焦った声と撮影みたいな言葉が聞こえたことからドラマ撮影中の忙しい時に連絡してくれたようだ。

主演がこんなんでいいのかと思わなくもないが、昔からお姉ちゃんはこのなんだったかとすぐにどうでもよくなる。

お姉ちゃんに振り回されるスタッフさんと彼らの働き方改革がよくなることを祈りつつ。

「とりあえず準備しよっか」

明日の準備と予定を組み、この日は終わるのだった。

電車移動にポツキーは必須（電車移動です）

旅行1日目。

僕と沙春ちゃんは電車に揺られていた。

「1時間でしたっけ？」

「そうだね。新幹線でも乗ればもつと早かっただろうけど」

バイクで行く方法も考えたが、沙春ちゃんに万が一にも怪我をさせたら切腹レベルなので今回は電車移動にすることにした。

普通の大学生と小学生らしく（？）各駅停車である。

まあ、駅から目的地行きの専用バスも出てるみたいだし時間がかかる以外はそんなに困らないだろう。

ちなみに沙春ちゃんの服は、黄色のパーカーに赤いスカート、さらに黒のタイツ。

日本タイツ・ストッキング愛好会代表理事の僕にしてみれば彼女の黒タイツは非常にマーベラス。

個人的には40デールの透け感のあるいやらしさも好きだが、彼女の60デール（推定）も好きだ。

40デールより透け感こそ少ないもの、女の子の秘密を必死に隠している感じがして堪らない。

「……とーはの目が変態さんモードになっているです」

沙春ちゃんがジト目でぼくを睨む。

しまった、僕のIOS（Iy arashi Orange Sensor）が暴走してしまったようだ。

しかし、変態さんモードか。

「その変態とこれから2泊3日の旅行に出るわけだけど大丈夫？」

あえて変態であることを肯定し彼女に迫る。

変態が幼女に襲いかかる寸前という非常に事案的光景完成である。

彼女も流石に恥ずかしいのか目をそらす。

「た、確かにとーははものすごい変態さんですけど……」

赤い顔のまま彼女は続ける。

「嫌がる私にひどいことはしないって信じてますから……」

——ああ、駄目だ。

「……とーは？つて何で砂になりかけてるです!？」

お姉ちゃん、天使によって変態は駆逐されました。
いつか僕も天使になって生まれ変わります。

『どうせ日和るヘタレ野郎』とも取れる事実に気づいたのは目的駅に到着した頃だった。

「うーん！ようやく到着しましたね！」

砂からの復活をした僕と天使な沙春ちゃんは、電車を降り駅構内を歩く。

ゴールデンウィークだからか流石に人が多い。

「はぐれたら危ないから手を繋ぐ？」

そう言つて手を差し出す。

子供扱いを嫌う微妙な年頃の彼女のことだ、きっと断られるだろう

——と思つていたので。

「お、お願いします」

「……はひよ？」

思わず某人気アイドルがかゆみ止めを塗つたような声を出す僕。

え、なにこの右手につながれたプニプニしたもの？

「……とーは？行かないです？」

「う、うん。行くよ！」

「？」

キョトン顔する沙春ちゃんを引つ張つて歩く。

わー、何これめっちゃ照れるんだけど。

とりあえず手汗をかかないように気をつけよう。

そう思いつつ旅館に向かった。

旅館で思い出したが、前に某少年探偵と某じつちやんの孫と一緒に宿泊先にいたらどうするかってスレを見たことがある。

親しくしてもダメ、離れてもダメっていう彼らの死神っぷりに驚いたものだ。

そんなことはどうでもいい。

「こ、これは……」

旅館だと聞いていたことから、和風の建物を想像していたが目の前にあるのは妙な光景だった。

「二「お帰りなさいませつ、ご主人様！」二」

Wow！メイドサン!!

：：なぜかアメリカンな反応をしてしまう僕だった。
とりあえず旅館はとても大きい。

純和風な感じで、昔からありそうなのに古さは感じない何とも趣のある建物である。

どっかの文豪が泊まったと聞いても疑わないだろう。

：：それだけに。

「よくぞ行らしたご客人よ。」メイド旅館　らぶりいはにい”は貴殿らを歓迎する」

：：ラ○ホテルかな、というツツコミはギリギリで飲み込んだ。

ズラリと20人はいるだろうか、ザ・メイドといったメイド服を着た少女たちが花道を作るように並んでいる光景は違和感以外の何者でもない。

その中心に黒髪長身の女性がいた。

おおよそ客に対しての言葉遣いじゃないと思うが、恐らくこの人がメイド長的な人なのだろう。

「私がこの旅館の女将メイドの”ゆきえ”だ」

違った、女将メイドだった。

……いや何なんだよ、女将メイドって。

響きが最高に気持ち悪すぎるんだけど。

後、彼女が差し出した名刺にもツツコみたい。

” 旅館らぶりはいはい 女将メイド ゆきえ”

どう見てもキャバクラの名刺だった。

「あー…：はい、よろしくお願ひします」

あまりツツコミどころが多すぎる事態に、逆に僕はツツコミを放棄した。

ロス〇ワンじゃないが、もうどうだっていいやつて気分である。

と、ここまで一言も発していない沙春ちゃんに気付く。

彼女もこのある意味酷すぎる旅館に困惑しているのかーーと思っただが。

「あ、あの、よろしく…：です」

フツーに人見知りセンサーが働いているだけだった。

あ、この子学校じゃボツチだったわ。